大正女子國文讀本 修正版 巻三

3759
H019
資料室

42178
教科書文庫
4
810
42-1923
200030
2419

資料室

375.9
H019

大正十二年二月一日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科用

保科孝一編

大正女子國文讀本

東京 資會社育英書院發兌

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 41743 圖書

大正女子國文讀本 修正版 卷三

目次

一 皇后陛下の御盛德……（聖德餘聞）……一
二 櫻の歌……與謝野晶子……八
三 勿來關……熊田葦城……一四
四 汽車の中より師の許へ……下田歌子……一八
五 春日野……大類伸……二一
六 二宮尊德の妻……留岡幸助……二五
七 若葉……吉江孤雁……三三
八 春やいづこに……島崎藤村……三七

九　壺の思ひ出……佐藤功一……三九
一〇　平安朝の才媛……新保磐次……四八
一一　加賀の千代女……佐々政一……五六
一二　雜草……與謝野晶子……六三
一三　涙の泉……徳田菊枝……六五
一四　夏の小暦……田山花袋……七二
一五　蜀山人の盆燈籠……饗庭篁村……七八
一六　湘南雜筆……徳富盧花……八六
一七　伊豆半島　その一……志賀重昂……八九
一八　伊豆半島　その二……九五
一九　乃木將軍旅順攻……山路愛山……一〇二

二〇　正行の母……高橋淡水……一〇九
二一　太閤と曾呂利……湯淺元禎……一一九
二二　木村重成の妻……海上龍子……一二四
二三　スエズ運河……島崎藤村……一三〇
二四　水の都……大類伸……一三六
二五　自然の調和……有馬武郎……一四四
二六　暴風見舞……樋口一葉……一一七
二七　顔……大塚楠緒子……一五一
二八　蟲の聲……沼波瓊音……一五六

廣島大學圖書之印

大正女子國文讀本 修正版 卷三

東京のかたほとり　東京府豐多摩郡杉並村　御乳母　大河原てい

一　皇后陛下の御盛德

皇后陛下は御幼少の頃、東京のかたほとりなる一農家にて、御乳母の許に御成長あらせられしかば、元より御體質のすぐれさせ給へる上に、いよ〳〵御健かにならせ給ひ、華族女學校に通はせ給ひし九年の間に、御病氣と申すほどのことは、一度もあらせられざりきとぞ。

陛下は御幼少の頃より、人の力を借ることを好ませ給はず、何事も自ら進みて爲し給ふ御氣風にて、御動作もいと活潑に渡らせられしが、やう〳〵御成長あらせらるゝにつれて、何事にも愼み深く、靜肅を旨とし給ひ、さま〴〵の會合などにも、たやすくは臨ませ給はず、多數の人の中にては、先立ちてとかうの御意見を述べさせ給ふことなく、折節の御言葉も、無くて叶はざる時にのみ言出でさせ給ひ、御學友との御物語にも、御躬づから語らせ給ふよりは、他の談話を聞かせ給ふを喜ばせられたり。されどをり〳〵言出

で給ふ御言葉はいと明かにて、優しきが中にも、おのづから犯すべからざる高き氣品を具へさせ給ひきと云ふ。また夙くより御儉德に富ませられ、御服裝の如きも質素を旨とし給へば、侍女などの少し御裝はせ給ふやう勸めまゐらする事もあれど、いつも用ひさせ給はず。或時御同級の御學友と打連れ、何處へか出で給はんとの御約束ありしに、誰言

皇后陛下御眞影

出づるともなく、裝は打揃へて同一にするこそ好けれ、衣服はしかじか、髪はかくかくと談じ合ひけり。陛下は斯くと聞かせ給ひて、暫し打案じ給ひしが、やがて、「衣服は如何なるものにてもよからん。ことさらに新しく好みて作らんは、益なき事ならずや。」と宣ひて、それに同じ給はざりしかば、皆々げにもと心づきて、御旨に從ひ奉りきと云ふ。

陛下は又御早起にならはせ給ひて、仕うまつる者どもの、やうやく雨戸繰りあくる頃より、必ず御起床ありて、直ちに御手水を召させ給へり。或時常の如く

早く起出でさせ給ふに、折しも日の出いと遲き冬の頃なりければ、やうやく御湯釜の下を焚きつけたるばかりにて、御湯はまだ日向水ほどにも溫まらざるに、つゆ厭はせ給ふ御氣色もなく、其のまゝ汲取りて用ひさせ給ひしかば、人々いたく畏みて、翌朝よりは夙く起出でて、御湯を沸しまゐらせたりき。さるほどに、陛下は早くもそれを知しめされ、「我が身一人の爲に、斯く人々を勞する事の心苦しさよ。」とて、其の後は御遠慮ありて、起出で給ひても、すぐには御手水を召されざりしかば、仕うまつれる者ども愈畏みて、あ

りがたき御心に感じ合ひきと云ふ。

陛下の東宮妃とならせ給ふべき御議既に定まり、華族女學校を御退學あらせらるゝ事となりし折、御父道孝公、「宮中に入らせ給はば、學校の人々との御物語も、たやすくは叶ふまじ。」此の際に人々を招きて、御告別あらせられ、且は日頃の誼をも謝し給はんこそ然るべけれ。」とて、其のよしを聞えまゐらせられしに、陛下はいたく喜ばせられ、「同じくは、幼き頃より訓育の恩少なからざる小學教師までも。」と望ませ給ひければ、「そは一段のことならん。」とて、御所望のまに〳〵

道孝公
公爵九條道孝

計らはれぬ。

斯くて小學以來御教育申し上げたる學校の教師を、殘なく御本邸に招かせられ、いと厚き御もてなしありて、陛下よりも親しく御告別の御言葉あり、且御記念として、御手づから貴き御品を下し賜ひぬ。

また嘗て御教育申し上げし人の中にて、既に亡き數に入れる人々には、其の遺族に若干の御目錄を遣はし給ひしかば、何れも思召に感じ奉りきと云ふ。貴き御身もて、なほ能く人に接し給ひ、眼前の者を慈み給ふのみならず、遙かに泉下の者までも惠ませ給ふ

御志、誠にありがたき極みとこそ申すべけれ。斯くも溫良・聰明にして、貞淑の德高く、慈悲の御心に富ませ給へる陛下を戴ける我が國民の幸福は、實に如何ばかりぞや。

（聖德餘聞）

私たちの歌　與謝野鐵幹、及びその妻晶子などを中心として歌はれた所謂新派和歌のこと

二　櫻の歌

櫻の時節となりました。櫻に因んだ私の歌に就いて少しばかり述べて見ようと思ひます。歌は註解を待つて初めて了解すべきものではありませんが、私たちの歌がどういふ心持から作られて居るかといふことを知つて頂く爲には、短い註解を附けた方が便利だと考へます。

彌生には少女の如く卯月には
　女となりて櫻さくなり

三月にはまだ小娘のやうな氣持のする蕾であつた櫻が、四月にはもう立派な美しい女盛りになつた氣持を人に與へて咲いて居るといふのです。

もり上る櫻を見れば春のため
　凱旋門の立つかとぞ思ふ

幾本かの櫻が集つて、高々と盛上げたものゝやうに

ルーヴル宮　フランスの王宮。パリーの中心地にある今は有名な博物館になつて居る

咲いて居るのを見ると、ふと美しい凱旋門――例へば巴里のルーヴル宮の前にある可愛い桃色の小さな凱旋門のやうな――が「春」の光榮を記念して立つて居る氣がします。

咲匂ふ櫻のもとを行く時は
所を得たる心地こそすれ

わびしく暮して居る私自身でありながら、美しく豐かに咲いて居る櫻の木蔭へ來ると、どうやら自分に適した所へ置かれた氣がします。私の潛在意識は必ずしも蓬蒿の間に朽つべきものとは諦めて居ないやうです。

この世をば誰もめでたき我が世ぞと
思はぬは無き花の下かな

豐麗な櫻は、人間と同じく不可思議な大自然から生れたものです。精神的に考へると、花も人も平等一體のものです。人は花の眞實によつて人間自身の眞實を觀ることが出來ます。何人も花の前へ來て、この世界を自分のためにある美しい高貴な世界であると感じないものはありません。

幾ばくもあらぬ盛りにこの櫻

砂を浴ぶなり街に立つとて
都會の街の並木となつて咲いて居る櫻を見ると、かういふ氣の毒な感があります。あたら盛りに砂埃を受けて醜い姿を曝さない日は少いのです。これは櫻の歌であるばかりで無く、みじめな私自身の生活を暗示しようと致しました。

牡丹ちりいと華やかに重なれば
哀しけれども誇らしきかな

之は櫻の歌ではありませんが、序に一首書きそへて置きます。豐艶な牡丹の花が、一片二片と散つて土の上に重なり合つたのは、固より哀しく感ぜられますが、また外の花にかういふ立派な姿をした最期があらうかと考へると、其の花の誇が更に人を感動させます。

明治の新派の歌の初めに、出來るだけ舊い感想から脱しようとして、舊派の用ひ慣れた題目を避けることが流行しました。「櫻」も其の時私たちの仲間に冷遇された一つの題目でした。さういふ破壞手段も改革の過程には必要なことでしたが、其の一時期が過ぎた後では、如何なる題目も公平に歌はれる時が

來ました。さうして其の時になると、同じ「櫻」を詠ずるにしても、櫻に對する見方や感じ方が、全く一新されて居ましたから、櫻はたとひ舊い櫻であるにしても、人がそれを新しく取扱はないでは居ませんでした。

（與謝野晶子―愛、理性及勇氣）

與謝野晶子　鐵幹の夫人。新派歌人として名高い

武衡　姓は清原、出羽の豪族

家衡　清原武衡の甥

三　勿來關

武衡既に縛に就き、家衡誅に伏し、其の黨四十八人また斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國内靜平にして、民心悅服す。乃ち留守を置きて、京都に還らんとす。

勿來の關　常陸・磐城の國境

春風長閑かに渡りて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠悠また戰時の秋に似ず。行き〳〵て勿來の關に差掛る。山上模糊として白きは雲か、地上繽紛として飜るは雪か。雲と見えしは梢の花、雪と思ひしは散來る櫻、關山春深きところ、心なき身も感などか起らざらん。兵馬倥偬（コウソウ）の間に在りては、月を見ても樂しからず、鳥を聞きても嬉しからず。今や干戈既に戢まりて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて顧望すれば、胄も花、鎧も花、身はいつしか畫中の人となる。

碑文

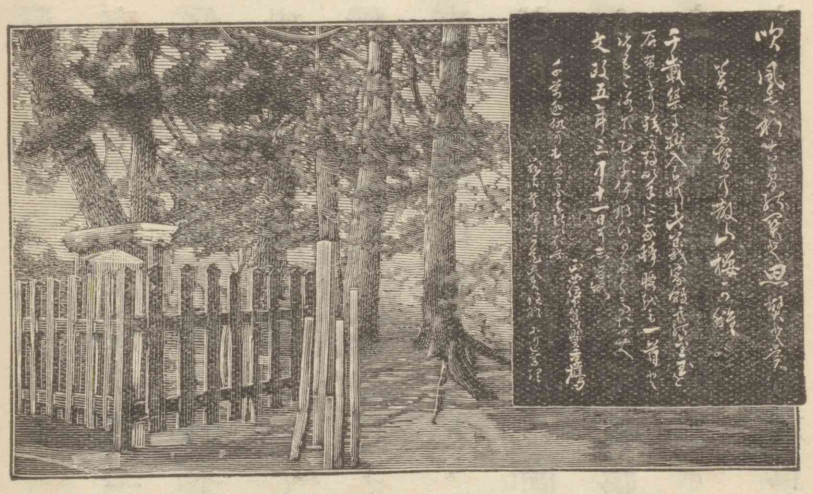
吹風を那古曾の關と思へども道もせに散る山ざくらかな

千載集に撰入せられし此義家の金玉を朝臣の石布みに殘す蜂の一首とつい腰をもねもころに乞ひたくてなむかたり

文政五年三月十一日にしるす

正四位下賀茂主季鷹

縣十萬廻仏にむかへるものゝふ母花そのゝかぜはすべなし



勿來の關址と碑文

逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。

吹く風をなこその
關と思へども
道もせに散る
山ざくらかな

一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするをも知らず。

斯くて長亭・短驛、日數を累

一貴人

關白藤原頼通（一〇五二―一〇四九）

ねて京に着す。百戰功を積みて、一門光を添ふ。來りて賀を述ぶるもの、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る、「陸奥は名所多き國と聞く。年久しく彼の地に在りつれば、皆それ〴〵に見候ひなん。是のみこそ羨ましき心地すれ」と。義家畏りつゝ答ふ、「心長閑けく候はんには、床しきことも候べけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候はず。唯勿來の關と申す所にて、花の散るさまの餘りに興深く、あはれ、心あらん人に見せまほしく覺え候ひしが、其の儘にうち過ぎなんも

口惜しく、拙き口吟に任せて、斯くなん仕りぬ」とて、彼の「吹くかぜ」の歌を吟誦すれば、「げにも秀歌をこそ致しつれ」とて、感歎特に淺からざりき。花は櫻木、人は武士、斯の人斯の花を詠じて、花と人と千古に香し。

（熊田葦城――日本史蹟）

熊田葦城　名は宗次郎。報知新聞記者

四　汽車の中より師の許へ

汽車は今、田子の浦邊を西へ〳〵と走り居り候。夕日華やかに雲を彩り、右手には富士の高嶺の姿ゆかしく仰がれ申候。紅を流せるやうなる雲の一むら

田子の浦　靜岡縣浦原町。富士川口の南岸。風光の勝地

二むら、折柄の風に誘はれて、眞白なる御山の頂を包むが如くたなびき渡り、白く清き雪と、赤く輝く雲と、蒼く澄渡れる大空と、相遇ひ相重なり、それに黄金色の夕日の光をさし添へ候有樣は、神々しとも美々しとも、譬へんやう御座なく候。

左は海原遠く見渡して、磯邊の松が枝靜かに夕風に動き、岸に碎くる白波は音のみ聞えて、あやにく目には見えぬが殘念に候。遙かあなたの海中に突出でたる處を指さして、車中の人々は、「あれこそ三保の松原よ」と言囃し候。

三保の松原　靜岡縣安倍郡。駿河灣中に斗出する沙嘴、長さ四十町餘

其の松原のあたり夕靄にうちかすみ、次第々々に薄絹もて包まれ行くやうに相見え候。こんもりとしたる松の林の黑ずみ行くを見れば、ほどなく暗の中に隱るゝならんと存候。

海は灰色にして、さゞ波だに立たぬ靜けさに候。この靜かなる海のほとりに立ちて、かのみやびやかなる富士の高嶺を望みつゝ、三保の松原の夕の鐘の沈み行く音を味はふ海人の身は、如何ばかりか心ゆく事ならんと存ぜられ候。

出立の際、先生より、「實地に就きて書きて見よ、良き練習になるものぞ。」と、仰せ下され候事思ひ出で候まゝ、一筆認め申候。車の搖れ候ため、思ふやうに書かれ申さず、いとも見苦しき亂れがき、解らぬ處は何卒御判讀なし下されたく、何れ鄕里に着き候上にて、詳しき事は申上ぐべく候。此の文は靜岡驛にて投函致すべく候。かしこ。

（下田歌子——三體女子消息文）

下田歌子　私立實踐女學長

五　春日野

奈良の附近は到る處古蹟が多くあります。古い寺の屋根が森の間に見え隱れする、五重の塔が歷史を

語りがほに霞んで見える、畑の間に礎だけ殘つて居て、その石の割れめに寂しく菫などが咲いて居る、何れも昔を思出の種とならないものはありません。

春日野　春日神社から興福寺の附近へかけての野

然し、あの優しい若草山の麓、そこは春日野と呼ばれてゐますが、その野ほど色々の語り草に富んだ處はありますまい。こゝにかはゆい無數の鹿が群をなして遊んでゐます。

春日神社　奈良市春日野町にある。官幣大社

春日神社の使はしめとして、奈良の人は今でも大切にして居ますが、昔は若しもその鹿に危害を加へると、その人は生きながら地中に石埋めにされたと言ふほど大切にされたものです。

猿澤の池　興福寺の南の崖下にある

奈良の御門　文武天皇

又、今はすつかり俗化しましたが、奈良名所の猿澤の池も春日野の一部と見られます。その池は、昔、奈良の御門の御時に、年若い采女が己が身の上をはかなんで入水したといふので有名になつてゐます。

春來れば云云　崇德天皇御製

猿澤の池から少し東、かはゆい鹿の澤山遊んでゐる緑の草原の間に、雪消の澤と呼ばれた小さい池があります。昔の歌にも、

春來れば雪消の澤に袖垂れて
まだうら若き若菜をぞ摘む

とありますが、奈良朝の昔に、あの優美な衣を着けた

うら若い少女たちが、おのが身の上にも似たうら若い若菜を摘んだのは、何れ此の池の畔であつたでせう。今は紫の色ゆかしげな藤の花が、長い房を水に垂れてゐて、四邊には只、新しい時代の人々が翳す赤や白のパラソルが目立つて見えるばかりです。併し千年も昔の春日野は、啻に少女の遊ぶ姿ばかりではなく、もつと嚴めしい光景をも其處に認められたのです。その頃春日野には「とぶひ」と言つて、烽火を高く揚げる處がありました。是は戰爭などの如き、國家に一大事の起つた場合に、高く火を揚げて急を知らせる爲で、春日野を一に飛火野といつたのもその理由からでした。そしてその烽火の番兵の嚴めしい姿も、此の野邊を徘徊したのです。されば こそ、古歌にも、

春日野の飛火の野守出でて見よ
いま幾日ありて若菜摘みてん

（大類伸――史蹟めぐり）

などと詠まれてあります。

春日野の云云　古今集、讀人しらず

大類伸　文學博士、歴史家。東京帝國大學文學部助教授

小田原　大久保氏十一萬三千石の舊城地

六　二宮尊德の妻

相模の國小田原藩に、服部十郎兵衛と呼べる一人の

家老ありけり。其の家奢侈に耽りし結果、千兩と云ふ、當時に在りては多大の負債を生じて、其の職をも勤め難きに至りぬ。依りて親族會議を開き、家老の役を辭するか、若しくは一家の仕法をつくるかを協議せしが、遂に仕法をつくる事に一決せり。

さて其の仕法をつくるには、栢山村の二宮金次郎こそ適任なれ。彼は將に斷絶せんとしたるおのが家を再興せるのみならず、村の爲にも盡瘁し、其の功勞尠からざる經濟家なればとて、二宮先生に其の仕法を依賴する事となれり。斯くて依賴の使者、先生の

栢山村
神奈川縣足柄上郡、今の櫻井村

二宮金次郎
即ち尊德翁
（一七八七—一八五六）

許に至りしに、先生は、「己は農夫なれば、到底さる依賴に應ずべき者にあらず」とて、固く辭退しけれども、容易に聽入れず、益〻懇請しければ、先生は已むを得ず二三の條件を提出し、其の中には、何にてもあれ、服部家は先生の言に違背せざる旨の條項もありしが、快く承引せられしかば、茲に愈〻仕法をつくる事とな

筆蹟

報德訓

父母根元在二天地一命一身體根元在二父母一生育一子孫相續在二夫婦一丹精一父母富貴在二祖先一勤功一吾身富貴在二父母一積善一子孫富貴在二自己一勤勞一身命長養在二衣食住三在一田畑山林一民勤耕一今年衣食在二昨年產業一來年衣食在二今年一艱難一年年歲歲不レ可レ忘二報德一。

乾山佐久間政裕書

尊德肖像及び報德訓

れり。これ實に先生が二十五六歳の時なりき。

爾來先生は服部家に住み、一定の方針を立てて、種々の勞役に從事せり。家扶・若黨の務は言ふも更なり、時には下女・下男の仕事すら爲し、五年の後、遂に千兩の負債を悉く償却し、なほ三百兩の剩餘金を得たり。依りて服部家にては、二百兩を自家の豫備費に充て、殘額百兩は報酬として、二宮先生に贈與したり。

さて先生は、其の百兩を懷にして別室に入り、下女・下男を集めて言ふやう、「不才の身を以て、五年間に當家千兩の負債を償還するを得たるは、一に御身等が余

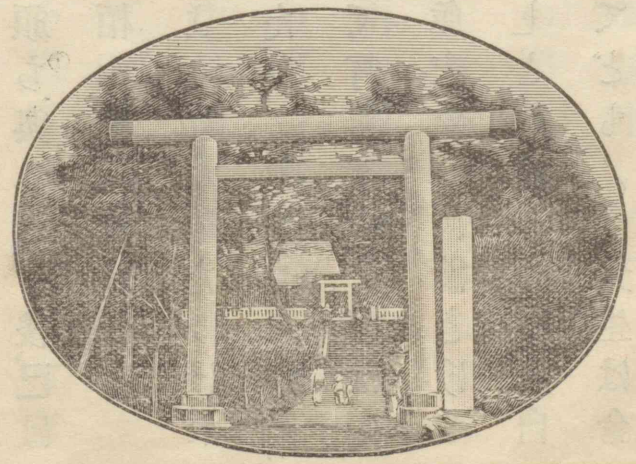
の意を體して勤務せしに因る。其の勞謝するに餘りあり」とて、懷中の百兩を全部頒ち與へたる後、己は一錢をも身に帶びずして、飄然栢山村に歸れり。

先生の歸村すべき由は、數日前より知れ居たりければ、妻は風呂など沸かして待居たり。兎角する中に、先生は久し振に我が家に歸りて打寛ぎぬ。妻は先生を一見して、先づ其の服裝の麁末なるに驚きけるが、懷中には巨額の金子あるべしと想像して、獨り自ら心を慰めゐたり。然るに、待てども〳〵先生は金子を出すべくも見えざりしより、妻は遂に堪へかね

て、「服部家より幾許の謝禮金を受け給ひしか。」と問ふ。先生告ぐるに實を以てし、百金を悉く下女・下男に與へし旨を答ふ。妻は且落膽し且憤怒して、「君の如き人に連添ひゐても、たゞ末のみ案ぜらるれば、今宵限り離緣し給はれ。」と乞ふ。先生は大いに當惑し、「御身も五年間家を守りゐたるに、今離緣を取りては、衣類とても無からん。

二宮神社
小田原町にある

二宮神社



櫻町
栃木縣都賀郡物井村の字。此の地は小田原侯の分知で宇津氏の采領であつた

強ひても歸らんとならば、暫く辛抱して、機にても織り、小遣錢をも貯へて後歸りては如何。」と宥めければ、妻も其の言に從ひ、暫時先生の家に止りしが、後遂に里方へ歸り行きけり。

先生が野州櫻町に赴任する時、伴なひ行きしは後の妻なり、名を歌子と云ふ。歌子は武家に奉公したりし女にて、氣象も強かりければ、先生より、「野州に赴くには、堅忍不拔の覺悟を要す。」と言渡さるゝや、「女は三界に家なしと承る、君と共にならば、たとひ水火の中なりとも厭ひ申さず。」と答へたりとぞ。

飯泉村　神奈川縣足柄下郡。今の豐川村の地

さて先生は、櫻町に於て漸次出世したる後、報德仕法の爲に、小田原近在を巡回せしが、其の時、以前の妻は甚だしく零落し、先生の巡回先なる飯泉村に來り、人を介して先生に面會を求めたり。先生は卽座に之を拒絶せしが、前妻の意蓋し金錢の無心にあるを聞き、「一旦離緣したる者に、金子は遣はし難し。但し明朝出立の際、村はづれに金を紙に包みて遺棄すべければ、之を拾はしむべし」と答へたり。

依りて前の妻は、翌朝未明より、村はづれなる松の木蔭に立隱れて待ちゐたりしに、頓てそこに差掛りし

留岡幸助　北海道に感化農園を經營し、兼ねて家庭學校の校長である

先生は、果して紙包を落したり。馳寄りて之を拾ひ見るに、中に五六兩ばかりの金子ありければ、涙を流して喜びたりと云ふ。（留岡幸助著「報德一夕話」に據る）

七　若葉

一年の中で、いつ頃が好きかと云へば、私は「初夏の頃だ」と答へる。

滿開の花も美しいが、櫻の堤などを通つて見ても、何だかまだ寒い冷たい影が、そこらあたりに殘つてゐて、花だけが特に飛びはなれて、枯木の頂を飾つてゐ

るやうで、何となく周圍の樣子と調和せず、造花でも見るやうで、これが果して實際の景色だらうかと疑ひたくなる。

花が散つて若葉の杜となると、全樹全林が生々として來て、其の綠の爽かなこと、私は何が美しいと云つても、此の嫩綠の色ほど美しく胸に泌みるやうな爽かさを覺えるものはないと思ふ。此の淡綠の色に包まれて、林の中に立つてゐる時ほど、心の底がそゝられるやうな、しめやかな悅を覺える事はない。

また若葉の杜は、たゞ淡綠の色ばかりではない。銀白の楢の芽や、淡紅の楓の芽や、赤みを帶びた褐色の樫の若芽などがあつて、まだ少しも塵にも埃にも染まず、葉も十分に伸びきらずに風に震へてゐる。其の中に來て居ると、それらの若葉が吐出す息を、自分の身に近く感じるやうに思はれる。

天氣が好く、日が照りつゞけてゐる時であると、若葉は暖かさうに見るく伸びて行きさうだ。白い雲がふわく と其の林の上を、明るく暗く陰影を投げて過ぎて行く。

曇り日の空の下には、若葉の杜は一層しんめりとし

て、雨氣を帶んだ空氣は、柔かな葉の心にまで泌込むやうで、重いと云ふ程でもないが、心が落着いて、善く物事を考へて見たいやうな心持になつて來る。

東京郊外の雜木の林の中には、必ず一本や二本、楡の樹の雜つてゐない事はない。葉は青く稍圓みを帶びて細長いが、山櫻に似たやうな、赤みの少しもない眞白な花が咲く。殆ど何人にも知られずに、森の中に咲いてゐるやうだ。其の花は散りだしても、櫻の樣にちらく飛びはしない。ほろくこぼれ落ちて、細い木の下路を一面に埋めて、白く敷いて居る。

吉江孤雁
名は喬松、文士

其の花が皆散つてしまふ頃は、そろく梅雨にならうとする時なので、重い空氣に壓されるやうに、花片は舞ひもせず、地に敷きつめて居る。花が咲いたと云つて人に騷がれる事もなく、唯默つて散つて行く。私は此の花を見る時ほど、沈默を思はせられる事はない。

（吉江孤雁）

八　春やいづこに

霞のかげに萠えいでし
いとの柳にうぐひすなれば

今はさびしき木下闇
あゝひと時の春やゝづくに

色をほこりし淺みどり
わかき昔もありけるを
今はしげれる夏のくさ
あゝひと時の春やゝづくに

うめも櫻もかすりはて
枝はみどりの酒のごと

島崎藤村
名は春樹、新體詩人、小說家

醉うてうづる夏のゆめ
あゝひと時の春やゝづくに

（島崎藤村―藤村詩集）

九　壺の思ひ出

私は子供の時分の私と壺との關係を、少し話して見たいと思ひます。

私は十四歳の時に母をなくしました。裏の井戸傍に徑一寸ほどの實のなる大きな梅の木がありました。夏の初に其の實が四斗樽に漬けられます。そ

して土用になると、それが簀の上に廣げられて天日に晒されます。そして秋の初になると、徑一尺一二寸ばかりもある瀬戸燒の赤い鐵砂釉の壺が、母の手に依つて低い板間の上に持出されます。それには口の邊に黑い流釉がかゝつて居ました。私は今でも、其の壺の様子をはつきりと思ひ浮べる事が出來ます。

十分天日に晒された梅漬が、大きな盆に盛りあげられて、其の壺の側に置かれます。母は極めて熟練した手付で、庖丁で梅の實を縱に四つに割ります。そして、たねを去つて、蓮の花のやうになつた其の肉が紫蘇の葉で包まれて壺の中に並べられ、一段毎に鹽がふられるのでした。かういふやうにして、壺が梅漬でいつぱいになると、口にはぴつたりと丸い板が當てられ、其の上が澁紙で包まれて、口元が細繩で結へられます。出來上つた時には、母の口元に會心の笑が浮ぶのでした。壺は軈て、其の低い床の下に土を掘つて、深さ一尺五寸ほどに作られた窖の中に納められます。これは私が物心づいてから母のなくなるまで、毎年きつと見られる年中行事のやうなも

のでした。

紫蘇卷の梅が其の中に入れられて、これが密封される、其の密封といふ事、それからそれが人目に觸れない冷たい窖の中に置かれる、其の窖といふ事、そして永い時日、其の儘そこに放置せられる、其の時日を待つといふ心持、さうしておくとだん〳〵に壺の中の紫蘇卷にうまい味の出て來るといふ、その不思議さ。是等の事柄は、結局、母の手に依つて處理される魔法の壺といふやうな、幼心には玄妙な、併しながら溫い親しみを以て迎へられたものです。今でも母を思ひ浮べる時は、必ず此の壺がそれに伴つて思ひ出されます。

いたづら盛りの年頃には、よく此の壺の藏してある窖の上の低い板間で、めんこ遊をしたものでした。鉛のめんこが揚板の隙間から床下に落ちこんだ時、板をあげて體を倒にして、床下に首を突つこんで搜し求めたものでした。さういふ時でも、此の壺にはそつとして觸れることを避けたものです。それは懼をもつてではなく、丁度眠つて居る赤子に對する時のやうな溫い心をもつてです。

何歳の時の事でしたか、東京みやげに金山寺味噌を貰つた事がありました。それは巾著のやうに首のくくれた、徑四寸ほどの壺に入つてゐました。そして丁度釜の蓋の樣な形の蓋で被はれて、其の上が紙で包まれてありました。私は其の壺が欲しくて欲しくて堪らなかつたものです。そこでこつそりと中の味噌を別の蓋物に移して、綺麗にそれを洗ひ上げました。後で祖母に見つかつて、大さう叱られましたが、併し壺は自分の自由に處理しても差支ないことになりました。私は嬉しさに壺を持つて座敷の

中を躍り歩きましたが、思はず柱に打當てて、ひやりと息のつまるやうな氣がしたことを覺えてゐます。それから此の壺を大切に布に包んで、抽出の中に入れて見たり、或は箱に納めて戸棚に入れて見たり、紫雲英の花を挿して佛壇に飾つて見たり、とつて來た鮒子や麥魚を泳がして緣先に置いて見たりしたものでした。そして遂には、鉛のめんこや、呼子の笛など、容積の小さい金屬製の玩具を其の中に納めて、土藏の傍の自分の庭、そこには裏の林から採つて來た小さい躑躅だの白百合などが植ゑてあつた自分の

庭に埋めました。そして其の上に小さい山を築き、前には池を掘つて、杉や松や槭などの芽生を植ゑました。なんでも近所の子供たちを呼んで來て、何か儀式のやうな事をして、あとで物をたべたやうに思はれます。

池と山との間には鳥居や幡などを建てたのですから、昔の人の陵墓や社などを築く心持と同じであつたのでせう。さういふ書物を讀んで居たとか、人から話を聞いたとかいふ事はなかつたのですから、かういふ行爲は子供の頭に自然に發する思想に基くものなのでせうか。

こんなわけで、壺は地中に埋められました。そして日々其の前に來て考へる事は、壺と其の中に納められたものが、どんな風になつて行くかといふ事でした。この考がだん〳〵高じて來て、遂にはどうしても掘出して見なければ氣が濟まなくなるのでした。それで壺は、一ヶ月とは土中に埋められてありませんでした。其の後此の壺がどうなりましたか、全く記憶に殘つて居ません。

兎に角金山寺味噌の壺が、幼年の私には何物にも代

へ難い寶物であつたのです。桃山期あたりの茶の全盛時代に、舶來の雜器、それは口の惡い人からえたいの知れないといふ形容詞を冠して呼ばれる雜器が、茶入や水指や抹茶茶碗などに用ひられて頗る珍重され、遂には金襴や其の他の名物切に包まれて、幾重かの箱に納められるやうになつた事などは、子供と大人との相違こそあれ、同樣の心理に基くものでもありませうか。

（佐藤功一――中央公論）

佐藤功一　工學博士。早稲田大學教授

一〇　平安朝の才媛

一條天皇　第六十六代（一六四〇―一六七一）

史記　二十四史の一、百三十篇、漢の司馬遷の著。太古から漢の武帝に至る三千餘年間の歷史

平安朝多士濟々の世に在りて、錦上に花を添ふるの美觀を呈したるは、才媛の輩出にして、殊に一條天皇の御代に於て、空前絕後の有樣を呈せり。紫式部・清少納言・赤染衞門・大貳三位・和泉式部・小式部內侍等、最も世にあらはる。

紫式部は越前守藤原爲時の女なり。式部幼きより穎敏にして、兄惟規（コレノリ）が史記を習ふを聞きて悉く之を暗記し、惟規が忘れたる所を敎へて、少しも誤らざりしかば、爲時常に歎じて、「此の子の男ならざりしこそ口惜しけれ」と言ひけり。式部長ずるに及び、和歌・音

樂の道は云ふも更なり、和漢の經史・佛典通ぜざる所なかりしも、生涯謙德を守りて、一と云ふ字をだに知らざるが如くなりき。式部、左衛門權佐藤原宣孝に嫁せしが、早く夫に死別れて、中宮上東門院に宮仕せり。當時宮女の品行甚だしく亂れし中にありて、能く貞操を守りし式部は雄々しといふべし。色を正しくし、聲を厲しくし、劍に伏し、節を全くする貞女は、古來聞く所稀ならず。言容を婉曲にし、用意を周密にし、怒を激せしめず、隙に乘ぜしめず、以て能く己が淑德を全くし、人の令名を傷らざること、式部が如き

上東門院　藤原彰子の稱號。道長の女、一條天皇の中宮（一六四八―一七三四）

詩　詩經

源氏物語　五十四帖ある

大貳三位　藤原賢子。太宰大貳高階成章の妻

後一條天皇　第六十八代。一條天皇の第二子（一六六八―一六九六）

狹衣物語　八卷

清原元輔　歌人。村上天皇の時に和歌所寄人となり後撰集の撰者に加はる。梨壺五人の一（一六六八―一六五〇）

は蓋し少なし。詩に曰く、「既に明かに且哲にして、其の身を保つ」とは、式部を謂ふか。著す所の小說源氏物語は、百世に愛讀せらる。其の文辭は婉曲・流麗、其の描寫は巧妙・精細なり。吾が國の小說にして、社會の眞相を寫し、人生の明鏡を揭ぐるもの、源氏物語を以て嚆矢とす。

大貳三位は紫式部の女にして、後一條天皇の御乳母に選ばれたり。著す所の小說狹衣物語は、文章の妙源氏物語に次ぐ。

清少納言は歌人清原元輔の女にして、博く和漢の學

皇后定子　藤原道隆の女（一六五六―一六八〇）

香爐峰　支那江西省九江府（古名潯陽）の南なる廬山の北峰、峰の北に遺愛寺がある。風光絶佳

白樂天　名は居易。唐の詩人（772―846）

香爐峰雪云云　遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看（白氏文集）

伊周　藤原道隆の男

枕草紙　三卷

に通じ、皇后定子の宮に奉仕せり。雪いと深く降りける日、閉ぢこめてありけるに、皇后は雪景色を御覽じたくやありけん、「少納言よ、香爐峰の雪は如何ならん。」と仰せければ、少納言直ちに立ちて、御簾を高く捲上げたり。こは白樂天の句に、「香爐峰雪撥簾看」とあればなり。斯かる才女なりければ、內侍にもなさるべかりしに、皇后の兄伊周左遷の混雜にて、其のことに己みぬ。されど此の人常に才學を恃み、往々老學士をさへ言ひこめて、溫厚の德に乏しと云はれたり。著す所の隨筆枕草紙は、源氏物語と竝びて世に稱せらる。後世和文の模範を云ふもの、老蒼・渾厚には伊勢物語を推し、婉曲・富麗には源氏物語を推し、簡勁・銳利には此の枕草紙を推せり。

伊勢物語　二卷、和歌を主とした短篇物語集

赤染衛門　赤染時用の女

大江匡衡　學者、文章博士（一六二―一六七二）

藤原公任　關白頼忠の長子。詩賦、音樂に巧に、また和歌に長ず（一六六六―一七〇一）

以言　大江氏。文章博士

齊名　紀氏。學者、詩文の達人

赤染衛門は大江匡衡の妻にして、上東門院の御母に仕へたり。藤原公任嘗て不平ありて、中納言を辭せんとして、辭表を以言、齊名の諸名家に託せしに、皆意に合はず、遂に之を匡衡に託す。匡衡家に歸りて愁ふる色あり。衛門その由を聞いて言ふ、「彼の卿は他に誇る心ある人なれば、其の先祖の歷々なるに、己は官位の滯れる旨を書き給はば如何に。」と。匡衡之を

然りとし、冒頭に書して、「臣は五代の太政大臣の嫡男なり。曩祖忠仁公以來云々」と云ふ。公任果して感悅斜ならざりき。斯かる才女なれども、平生溫厚の人なりしかば、紫式部は深く其の人品と歌とを稱揚せり。藤氏の榮華を記せる榮華物語は、衞門が筆なりと言傳ふれど、實は衞門が日記を始として、諸家の記錄を綴り合せたるものならんと云ふ。

和泉式部・小式部內侍、母子共に歌人にして、上東門院に仕へたり。小式部幼きより歌に巧みなりければ人皆母の潤色する所ならんと思へり。然るに母は

忠仁公　藤原良房。冬嗣の子（一四六―一五三）

榮華物語　宇多天皇の寬平年間から堀河天皇の寬治六年に至る凡そ二百餘年間の歷史

和泉式部　大江雅致の女。初め橘道貞に嫁す

小式部內侍　母に先立つて死んだ

丹後守藤原保昌に再嫁し、夫と共に任國に下りける頃、禁中に歌合ありけり。公任の子中納言定頼、小式部が局の前を過ぐるとき、「丹後に遣はされたる使は歸り參りたりや」と揶揄しければ、小式部簾より半ば出でて、定頼が袖を控へ、

大江山いく野の道の遠ければ
まだふみも見ず天の橋立

と詠めり。蓋し「蹈みも見ず」と「文も見ず」とを掛けたるなり。定頼その才敏に驚き、「こはいかに」とばかり、返歌もせず逃行きけり。

藤原保昌　膽勇あり武力あり又和歌に長じてゐた（一六八―一六六）

大江山　一名老坂、山城・丹波の國境

いく野　丹波國天田郡上六人部村の大字

天の橋立　丹後國宮津灣の西北岸江尻から東南に突出する洲。長さ二十七町

伊勢大輔　歌人。三十六歌仙の一人、上東門院に仕へた

馬内侍　一條院皇后の女房。三十六歌仙の一人

天皇　一條天皇

新保磐次　號は一村、文章家

額田の女王　天智・天武の御代の人

此の外、匡衡が女江侍從、伊勢祭主大中臣輔親の女伊勢大輔、左馬頭時明が女馬内侍など云ふ才女なほ多かりき。されば天皇も、「朕、人を得たる事は、延喜・天暦にも勝れり」と自讃し給ひけり。（新保磐次――趣味の日本史）

一一　加賀の千代女

敷島の道には、古來多くの女流名家が出て居る。額田の女王・小野小町・紫式部・和泉式部等は、何れも斯道の名家である。けれども俳句界には、未だ斯樣な才媛が出てゐない。芭蕉翁以來の名人は、多く男子で

加賀の千代女　（一六六二―一七三五）

松任　石川郡、金澤の西三里十一町、本誓寺に千代女の墓がある

ある。唯此の中にあつて、女流俳人を代表し、今日も世に賞讃されて居るのは、加賀の千代女である。

千代女は今から二百餘年前、加賀國松任といふ在方に生れた。父は福增屋六兵衛と云つて、表具師を業として居た。家は餘り裕かでは無いが、表具師であるから、自ら風流の道にも通じてゐた。千代女は斯樣な家に生れ、斯樣な父を持つた事とて、幼いながらも風雅の道に志し、殊に十七文字の俳句を好んで、小さい頭をひねつては、春花秋月などを詠じてゐた。其の頃は俳句の盛な時代で、全國何れの地に於ても

流行を極めて居り、又有名な宗匠も少なくなかつたが、松任のやうな田舍には、到底良宗匠のある筈が無い。六兵衞は勿論のこと、千代女も深くこれを殘念に思つてゐた。

筆蹟
百なりやつる
一筋の心より
ちよ

千代女筆蹟

盧元坊
各務支考の門人（二巻三―二四〇ページ）

すると、或時名高い宗匠が、行脚の折から圖らずも、松任に來て泊ることになつた。それは盧元坊と云ふ

俳諧師である。六兵衞は豫てから盧元坊の評判を聞いて居たので、早速その由を娘の千代女に知らせる。千代女は飛立つばかりに喜び、盧元坊の宿を訪ねて、丁寧に教を乞うた。盧元坊は此の日長道中をしたので、大分疲勞して居たものの、千代女の熱心に對し無愛相も出來ず、承諾の旨を答へ、時節に因んだ時鳥の題を出して、「一句作つて見よ。」と言つた。千代女は早速作つて一句を示すと、「それではいけぬ。もう一句。」と言ふ。又一句考へて差出したが、「それも駄目だ。」と取上げられぬ。千代女は一所懸命に句作

に耽つたが、妙想が浮かんで來ぬ。益〻考へる。其の中に夜もだん〳〵と更けて來た。盧元坊は晝の疲に堪へぬのか、うと〳〵と眠り初めた。千代女は口惜しいとも思つたが、それも一寸の間のこと、愈〻思を凝して句作に熱中して居た。

鷄の聲が彼方此方に聞え初めて、東の空が白んで來た。やがて雀も塒を出て、軒端に餌をあさる頃となつた。熟睡して居た盧元坊が、不圖眼を覺して見ると、昨夜來た千代女がまだ坐つたまゝでゐる。さすがに驚いて、「お前はあのまゝ寢ずに居たのか。」と聲をかけた。千代女は其の時丁度句案が成つて、

時鳥時鳥とて明けにけり

と、見事に一句を詠んだ。坊はつく〴〵口ずさんで見て、「いや、是は實に名吟だ。」と、始めて其の句を褒め、昨夜からの無禮を謝し、「永く此の心持を忘れず、勉强するやうに。」と言つて、懇ろに句作上の方式などをも教へたのである。

其の後千代女は、盧元坊の師匠の東花坊、または乙由などにも就いて學び、益〻其の俳名を高めた。十八歳の時、良緣あつて他へ嫁いだ。まめ〳〵しく働いて、

東花坊　支考をいふ。美濃の人、芭蕉の門人（一六三二―一七三九）

乙由　中川氏、號麥林舍、芭蕉の末弟（一七一三）

他へ嫁いだ　金澤の表具師福田彌八に嫁す

能く其の家を治めたが、其の間にも猶俳句を忘れず、時々名吟を詠んでは世間を驚かした。嘗て其の愛兒を失つた時、左の一句を詠じた。

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら

既に小さい柩は送つたのであるが、可愛らしい姿は髣髴としてなほ眼底にある。涙の泉も涸盡して、唯うつとりと、去來する蜻蛉を見つめてゐると、何時しか我が兒は遊に耽つて、家路を忘れたのではないかとさへ思ひ惑ふのが、實に母親の至情であらう。悲しいとも戀しいとも言はない所に却つて切ない情が察せられる。吟ずれば吟ずるほど、深い味の出る句である。

千代女は又夙く其の夫を失つて、たゞひとり殘つた男の子に家を嗣がせ、今は心安いと、惜しげもなく黑髪を剃落して、名を素園と改め、只管風雅の道を樂しんで、安永四年、七十四歳で安らかに往生を遂げた。

（佐々政一）

安永四年後桃園天皇の御代（二四三）

佐々政一　號は醒雪、京都の人、文學博士、大正六年歿す、年四十六

一二　雜草

雜草こそは賢けれ
野にも街にも人の踏む

路を殘して青むなり

雜草こそは正しけれ
如何なる窪も平らかに
圓く埋めて青むなり

雜草こそは情あれ
獸のひづめ鳥の脚
すべてを載せて青むなり

涙の泉　大正二年三月二十八日飛行中墜落慘死を遂げた徳田中尉未亡人菊枝子が其の友人に送つた書信の一節

雜草こそは尊けれ
雨の降る日も晴れし日も
ほゝゑみながら青むなり

（與謝野晶子――若き友へ）

一三　涙の泉

（前略）よくこそ「泣け」と仰しやつて下さいました。「泣け」と仰しやつて下さつたお方はあなたばかりです。泣きます、泣きます。私はどうして此の事が諦められませう。「去る者は日々に疎し」といふ世の中に、ほんとに嬉しいあなたの御心。

おちぶれて云々　おちぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥ぞ知らるゝ（作者不詳）

噂に聞けば、私が澤山なお金を戴いたので、「何たる仕合者だらう、羨しい。」と仰しやつた奥様方もおありとか。　おちぶれて袖に涙のかゝる時、始めて様々な人の心を知り得ました。　なるほど、皆様の厚い御同情のお蔭で、物質上には何不足のない身となりました。併し破れた心、荒んだ胸の此の痛手は、たとひお金の山を積んだとて、それで購ひ得られませうか。　手鍋さげても、月洩る賤が伏屋でも、夫婦・親子揃つての幸福に優るものが、外に御座いませうか。

嗚呼、三月二十八日、思うても身が戰きます。

晶子　與謝野晶子

飛行場　埼玉縣所澤町に在るものを指す

わぎもこと春のあしたに立別れ
空のまひるの十二時に死す

と、晶子様のお歌の通りで御座いました。「晝は歸るよ。」と出て行つた門口、ふと足を止めて、後を振返つた其の俤！　それが私の見た此の世での最後の姿で御座いました。

「歸る。」と云つた家には歸らず、恨は盡きぬ飛行場の一隅、觀測所の一室で、此の世に遠い姿に接した時、お察し下さい、あなた、私は――こんな意氣地なしの私でも――強い女になつて居りました。　涙一滴こぼしませ

んでした。

あゝ、其の時、冷たい骸に向つて、吾が世のかぎり心のかぎり泣いたなら、こんなに思が殘りはしなかつたらうにと思はれます。どうしてこんなに愚痴なのでせう、まだ良人が、此の世の何處かに生きて居るやうに思はれてなりません。道を歩いても、電車に乘つても、軍服を着けた人さへ見れば、いつも、なき人を思ひ出します。お笑ひ下さいますな、せめて夢にでも見たいと思ひます。これもやはり女の愚痴なのでございませう。

中野 東京府豐多摩郡、東京市の西郊一里許

大久保 同府同郡大久保町。當時作者は此の町の親族の邸内に居住してゐた

新宿 元同府同郡内藤新宿町。先頃東京市に編入された

以上三町は中央東線停車場所在地で同線電車停留所である

戸山が原 東京市牛込區に在り大久保町に接してゐる

忘れもしません、あなたにお目に懸つたあの日で御座いました。あの日は、中野まで用事があつて參つたので御座いました。中野は氣球隊のある處、良人は其の隊附で御座いましたので、色々の事が思はれて、感慨無量の中に、大久保まで歸りましたら、圖らずあなたにお目にかゝり、嬉しいやら悲しいやら、亂れる胸を抱へて新宿に廻り、戸山が原に歸りました時は、夕日も西に沈んで、燃えるやうな雲の間を、群に離れた一羽鴉、その飛ぶ樣が丁度飛行機のやうに見えますので、思はずぢつと見入つて居りますと、後の方

淑子
徳田中尉の遺子

から、靴音高く將校が追越しました。それは丈の高い砲兵中尉でありました。私は云ひ知らぬ淋しい心で、其の後姿を見送つて居りますと、側の淑子が突然、「あら、おとう樣。」と申します。私は腸を斷たれる思で、「あれはおとう樣ではありません、よそのおぢさんですよ。」と申して居りますと、四つばかりの女の子が、向ふから嬉しさうに走つて來て、先刻の將校に抱きつきました。將校も其の子の手を引きながら、何やら打語らひながら、夕靄の中に消えてしまひました。嗚呼、半年前までは、淑子もこんなにして頂いて居たものを、此の世に在さぬとは知らないで、あんなにして尋ねてゐる心のいぢらしさ。私はもう堪へきれないで、人目のないまゝに淑子を抱締めて、暫くは泣崩れました。

二人の子供
淑子と長男晃一と

飛鳥川
大和國に在り初瀬川に入る古今集雜下に「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」

朝夕御靈に禮拜する毎に、二人の子供も必ず側に來て、手をついて拜します。其のいたいけな姿を見る毎に、胸が張裂ける思が致します。承れば同じ學びの庭の友垣の中にも、不運・悲運の魔の手に捉はれて居られる方もおありになるとか。誠に水の流と人の身は、昨日に變る飛鳥川、今更ながら身にしみ渡る

浮世の風、泣いても泣いても涙の泉は盡きません。あゝ、此の涙、殘る半生の慰は、唯この熱い涙ばかりで御座います。（下略）

（徳田菊枝）

一四　夏の小暦

七月初旬の曇天は、續いて月の末に至る事あり。又中旬より晴れて、赫々たる炎威を恣にすることあり。茲に至りて、人は始めて夏の暑さを感ず。

夏は曇りたるより照りたるぞよき。碧空に、日の光きらゝかに輝きて、金をも鑠さん日、靜かに机に向ひて書を讀むも、興なきにあらず。黄塵の堆き中に、おのが業にいそしむも、亦自ら樂みあり。芭蕉の廣葉に夕風の渡るを、聞きつゝ、靜かに華胥に遊ぶ暇あらば、如何に嬉しからん。

日の暮るゝを待ちて、檐の岐阜提燈に火を點じ、緣に花蓙敷きて、團扇搖がしつゝ、一家團欒の物語に耽る、眞に得難き夏の賜なるべし。闇の夜にてもよし、空に閃く星の影を數へて、北斗の所在などを指しあはん。月あらば殊更なり、梧桐・寒山竹の間より、研ぎすましたる鏡の如き光を仰がんには、晝の暑さも忘れ

果つべし。

幼き頃田舍にゐて、垣根の杉などを手折り來て、古摺鉢に灰少し入れて、蚊いぶししたることを思ひ起す。蚊遣火は趣深きものなり。そこにも知らぬ森の中に、ゆくりなく立ちあがる蚊遣の烟、こゝにも人住めりやと懷かし。

夏の旅ことにをかし。日盛りの二三時間を、松並木の涼しき休茶屋に寢て過し、朝と夕とに歩みても、日永き頃なれば、冬の日よりも却つて長き里程を歩み得べし。田舍道の休茶屋などに、清き水湧出でて素麺を冷したる、食指おのづから動く、

木曾　長野縣西筑摩郡、木曾川沿岸一帶の汎稱

御嶽　信濃・美濃・飛彈の國境。海拔九八四一尺

駒が嶽　信濃・甲斐の國境。海拔八九八〇尺

乘鞍が嶽　飛驒・信濃の國境。海拔九九〇〇尺

白山　加賀・飛驒の國境。海拔八九四〇尺

立山　越中の最高山海拔九六八八尺

登山も夏の面白きものの一つなり。輕裝して都を出で、遙かに連山の蒼翠を望む、心既に白雲の上に在り。登山の快味は絶巔に登り得たる時に在り。是言ふを俟たず。されど絶巔の上に至るの努力も、亦快味の一なり。喘ぎ〳〵つゝ登るに、森林盡き、草原盡き、高山植物盡き、遂に岩石磊々たる處に達す。一望誠に天下を小にするの思あるべし。登るべき山は富士山を始め、木曾の御嶽、駒が嶽、日本アルプスの稱ある飛驒の乘鞍が嶽、北陸の白山・立山など。

海もよし山もよし。山深く谿流清く、翠嵐搖曳たる處殊によし。海ならば絶海のほとり、怒濤天を捲く邊に行くを要す。世の常の海水浴場など徒らに暑さを增すの料たらんのみ。

七月中旬乃至下旬より、晴れたる空は、年によりて多少の相違はあれど、十五日乃至二十日續くべし。此の照りによりて、稻も其の穗を成長せしむ。此の照り此の暑さの稍緩む時、卽ち土用のあけ頃より、低氣壓襲ひ來りて、夏の雨しきりなり。

夏の雨は驟雨性を帶ぶ。忽ち晴れて美しき空現はれ、日の光射すかと思へば、白き黑き雲忽ち襲ひ來て、雨沛然として至る。物干竿の衣を取入るゝ暇もなし。其の雨量比較的に多く、處によりては河水氾濫し、鐵道不通になること往々にしてあり。避暑に行きて此の雨に逢ふは、佗しきかぎりなり。海も佗し山も佗し。避暑に行く人は此の雨以前に赴くをよしとす。

此の雨霽れて秋氣到る。殘暑なほ凌ぎ難けれど、樹間・叢裡、既に秋の聲あり。梧桐・芭蕉は殊に此の聲を聞くに佳し。歐陽修が秋聲賦の思ひ出さるゝは此

歐陽修　宋の政治家、文豪。唐宋八家の一人（一〇〇七—一〇七二）

の頃なり。

雲の色、雲の態、稍趣を變ふ。奇峰漸く少なく、白き雲多し。夜、稻妻の遠く光るも此の頃なり。一閃毎に、闇の中の雲の姿を明かに辨じ得たる、言ひ知らず面白し。田の面には涼しき風吹きわたる。

（田山花袋――花袋小品）

田山花袋　名は錦彌。小說家、文章家

天明・文化・文政　天明は德川十代將軍、文化・文政は十一代將軍頃

太田南畝　幕府の士で、文章をよくし狂歌に巧であつた人、號を蜀山といふ

一五　蜀山人の盆燈籠

天明より文化・文政まで、久しく文壇の牛耳を執り、寢惚先生の名に、世人の眠をさましたる太田南畝翁の事蹟に就きては、面白きこと頗る多し。今左に其の一つを記さん。

文化元年（二四六四）

文化元年の頃とか、小石川陸尺町に、庄助と呼ぶ男住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ、行燈燈籠といふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、殘りしが多ければ、力を落し、情なき顏してかつぎ歸りしが、太田南畝翁方へは常々出入る者ゆゑ、歸りがけに立寄りて、臺所のものに向ひ、「偖々、困る事かな。此の盆はいかにして過し申さん。今朝の市に、これ

神樂坂
牛込區にある

ほど燈籠賣れのこり候。此の分にては、明朝神樂坂の市に持行き候とも、又今朝の如くなるべし。もとより手細工にせしことにはあれど、いさゝか資本もかゝりたり。此の分にては、水も呑まれ申さず」とかこちけり。

南畝翁は座敷にて之を聞かれ手に持つ盃を置きて、「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにか」と問はるゝにぞ、傍の者「斯樣々々にて、又かのぐづ男が泣き

申し候」と言ひければ、翁は臺所に出でられ、「偖も氣の毒なることよ。顆の下が乾きては誰も難儀ならん。我が言ふ如くせば、少しは賣るゝ事もあるべし」と言はれければ、「そは有難き事に候。いかに致すべきか」と、翁の顏をいかにも有難げに仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、「これにて其の燈籠を張替へよ。我それに何か書きてやらん」と言はる。悅びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張替へて持ちきたれば翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔きつゝ一禮を述べて、荷ひ

歸りながらも、蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れざるに、いかに先生なればとて、かゝる冗書（ムダガキ）の反古張にては、買人もあるまじ。　さりながらあれ程に仰せられしものなれば、先づ明朝神樂坂の市に持行き、賣殘りたらば、其の事を申して歎きつき、二百疋も借りて外商ひの資本とせんと工面顏にて、足も重く、二三町歩む向ふより、侍一人往きすぎしが、供の者に言付けて、「其の燈籠は賣物か。」と問はしむ。　さてはと悅び、「いかにも賣物に候。　やう〳〵（ヨウヨウ）傳（ツテ）を求めて、先生に書いてお貰ひ申したるにて、心あても有りて拵へ候なれども、此のやうには入り申さず候。　お望ならば差上げ申さん。」と言ふに、「價はいか程ぞ。」と問ふ。　いくらと言ひてよき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて、「五十文。」と言ふ。「その直にて二つくれよ。」と、百文渡して買行きたり。　又跡より通りかゝりし人、「それ賣るならば買ひたし。」と言ふ。　今度は息を一杯に吹きて、「六十四文。」と言ふ。　言ふがまゝに又買行きたり。跡より又、「此方へも二つ。」「我にも一つ。」といふ有樣にて、己が家に歸るまでに、二十ばかりも賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、いきり立つて斯くと女房に

二百疋　一兩の二分の一

五十文　九百六十文で一貫、六貫三百文ほどで一兩

話せば、「誠に寢惚様は生佛なり、有難きことなり。明日は早くより持出で給へ。私も參りて手傳ひ申さん。」一人にては手が足るまじ。一つ盗まれても、五十と百の損なり。」と、女房の智恵は慾が先なり。翌朝夫婦はにこ〳〵、七つ起して神樂坂に行き、並ぶる間もなく、「蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。」と、立ちどまりて價を問ふ。庄助思ひ切つて、「百文。」と言へば、「さもあらん。」と、百文にて買行く。女房、夫の袖を引き、「百にても直切らずに、大勢買つて行かるゝからは、二百文と言ふとも賣れ申さん、二百文と言ひ給へ。」と、又智恵

をつくるに、庄助額に手を加へ、「二百は餘り高かるべし。百五十文にせん。」と言ふ。それより百五十文にて六七十賣り、つひには先見明かなる其の妻の言の如く、「二百文よりまかりませぬ。」と、肩を怒らして賣り、まだ五つ半にもならぬに賣切りたり。

錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦こけつまろびつ翁の宅に來り、亭主を搔きのけて女房まかり出で、「有難い。」を數千遍のべて、「いかにも先生は生神様なり。」と、今度は神あしらひにしつゝ、悦びかへりけりとぞ。翁が醉餘の戯、よく枯骨に膏すと

饗庭篁村　文學者、江戸時代文學に精通する人

湘南　文學的稱呼、相模國の南部海に面する地方の稱、但し現今は特に葉山・逗子邊をもいふ

いふべし。

一六　湘南雜筆

一

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

障子開き、簾を下して坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。富士も夏衣を着けぬ。碧の衣すがゝしく、頭には僅かに二三條の雪を冠れり。青疊敷く相模灘の上を、習々として渡り來る風の涼しきを聞かずや。

（饗庭篁村――雀躍）

二

今日始めて蜩の聲を後山に聞きぬ。一聲さわやかにして、銀鈴を振るが如し。

白日、山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば、川に釣る人あり、談笑の聲あり、花火を揚ぐる子供あり。夏の季節は始まりぬ。

三

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に殘照流るゝ川あり、後に靑蘆さやゝと戰げり。潮次第に滿ち、川逆さまに流れぬ。水澄みて水無きが

ごとく、水底地よりも鮮かなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのかいづは隊をなして、玉にも似たる水を游げば、其の影ちらく〳〵と底に印せり。石垣の穴より出で遊ぶだぼ鯊は、螯をあげて迫り來る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰕は杭を抱きて這登り、石垣に縋れる宿かりは、身を投ぐるやうにころころと水底に墜ちゆく。

下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より、涼風と共に流れ來る。汐滿ちさかれば夕陽明滅す。亂流の中、殘照の影やゝもすれば押流されんとし、小鮮群りて水を攪すれば、水流れて其の紋を消し、毳々たる川底の藻は水に梳られて、今にも流れ出でんとすれば、幾隊の魚苗も止りかねて流れ行く。

垂れたる足の爪先に水とゞく頃は、殘照消え、潮も滿ちて淀みぬ。鯔跳つてまた水に落つる音、石を投ぐるやうなり。

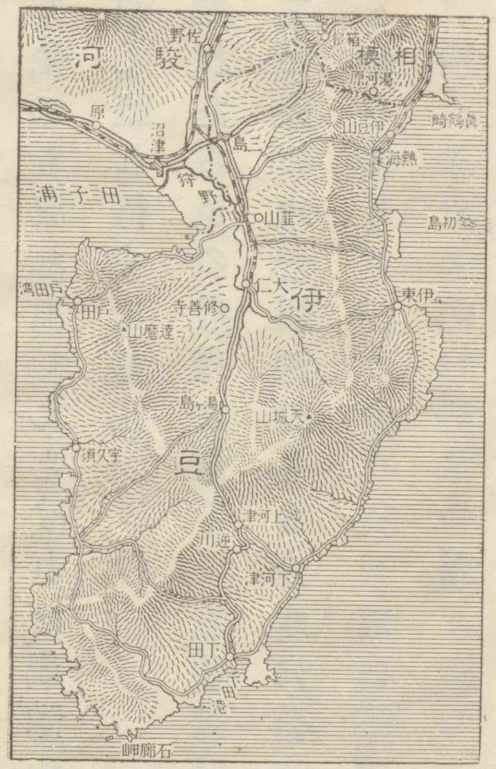
（徳富蘆花——自然と人生）

徳富蘆花　名は健次郎。小説家、文章家

一七　伊豆半島その一

伊太利と云へば、何人も直ちに氣候溫暖、天氣晴朗、四

季を通じて花笑ひ鳥歌ふ好風光を思ひ浮べる。また王覇千年の遺跡の聯想が起り英雄・豪傑・詩人・畫家・彫刻家等の追懷が生じて、一種云ふべからざる感興が喚起される。



歐羅巴の南端に突出する一大半島であつて、北の一方はアルプの雪峰が城壁のごとく之を固め、他の三方は海波に洗はれてゐる。そして紫色なアペニン山脈は全半島を縱斷し、到る處に溫泉があり洞窟がある。冬もなほ溫かであつて、國都羅馬は新年の平均溫度華氏四十七度、南端のナポリは、同じく四十五度乃至五十度の間を昇降してゐる。美しい色の蜜柑は、累々として梢頭に實つてゐる。歐洲中原の人人が、此の明媚な南國の風土にあこがれるのも無理はない。

伊豆は伊太利と同じく、南方に突出した一大半島であつて、北の一方は富士の雪峰城壁の如く之を限り

アペニン　全長約八〇〇哩、最高峰コルノは海拔九五九三呎

ナポリ　ナポリ州の首都。ナポリ灣に臨み風光絶佳。人口約七十五萬

天城山脈　箱根から來て南に走り、田方・賀茂二郡に亙る。海拔四二九〇尺。別稱狩野山

熱海　田一郡。三島から五里。小田原から七里

伊東　田方郡の東海岸。熱海の南五里

他の三方は海に面して、紫色の天城山脈は全半島を縱斷し、溫泉は數十箇所から湧き、洞窟は海岸いたる處に多く、氣候は外伊豆の熱海・伊東に於て、正月の平均溫度四十七度、卽ち羅馬と同一であり、內浦の河津は同じく四十八度半、外浦の宇久須は四十八度、卽ちナポリと殆ど同一である。

毎年元旦の頃、東京では寒冷雪を催す習であるが、伊豆へ行けば、楊は赤い芽を吹いて居る。枇杷は雪の如くに咲いて居る。梅の白と椿の紅とは相映發して居る。其の下に南天燭は紅珊瑚の珠を綴つて居

吉田松陰　長門萩藩士。幕末の志士（一八二九―一八五九）

る。蒿雀（アヲジ）が其の實を啄きに來る。頰白も負けじと飛んで來る。柚子と橙とは梢に殘つて居る。まして近年は、ネーブル蜜柑の香ばしい實さへ、枝もたわに生つて、一入伊太利の俤が添はつて來た。

伊豆は源頼朝勃興以來、鎌倉幕府・足利管領・後北條氏と、相次いで國史の舞臺となり、近くは吉田松陰が外船投航の事蹟に至るまで、地文と云ひ歷史と云ひ、如何にも伊太利に酷似して居る。

伊太利が、北部の口伊太利と南部の奧伊太利とに分れて居る如く、伊豆では、天城の嶺北を口伊豆と云ひ、

嶺南を奥伊豆と呼ぶ。殊に口伊豆には名所舊蹟が多く、一々列擧するのに堪へない。幸に是等の數多い史蹟は、狹い範圍、短い距離の間に、而も時代の相隔つたまゝに隣接してゐる。是も伊太利に遊んで、到る所名所と史蹟と相重なつて、應接に遑のないのを見ると同一の趣がある。

近世に於て、最も狹い範圍、最も短い距離の間に、日本歴史の重要人物を輩出したのは、鹿兒島市の下加治屋町を第一に推す。卽ち西郷南洲も大久保甲東も明治維新以來の長者吉井友實伯も、西南の亂の俠將

西郷南洲
名は隆盛、明治維新の功臣（一八二七―一八七七）

大久保甲東
名は利通、明治維新の功臣（一八三〇―一八七八）

吉井友實
樞密顧問官、明治二十四年歿、年六十四

村田新八
南洲と共に城山で戰死した（一八二七―一八七七）

東郷
名は平八郎、伯爵、海軍大將。元帥

大山
名は巖、公爵、陸軍大將、元帥、大正五年歿、年七十五

黑木
名は爲楨、伯爵、陸軍大將

村田新八も、日露戰役の大立物たる海軍の東郷、陸軍の大山、黑木、何れも皆この掌大の地に生れた。是等の人々は、それ〴〵に近世史の英雄であるが、併し王政維新以來の功臣と云ふだけに限られてゐる。史蹟と云つても、單に誕生の記念と云ふだけに感興が淺い。

一八　伊豆半島その二

然るに伊豆は伊太利の如く、いろ〳〵な歴史的事件と人物とで深く人の興味を動かす。口伊豆に入り、

芙蓉八朶　劍が峰・馬背嶽・雷電嶽・釋迦が嶽・藥師嶽・觀音嶽・經嶽・駒が嶽

韮山　田方郡、三島町の東南二里餘

江川家　江川太郎左衞門（坦庵）の家

白河樂翁　松平定信、田安宗武の第七子、松平定邦の嗣、白河城主（一七四二—一八〇八）

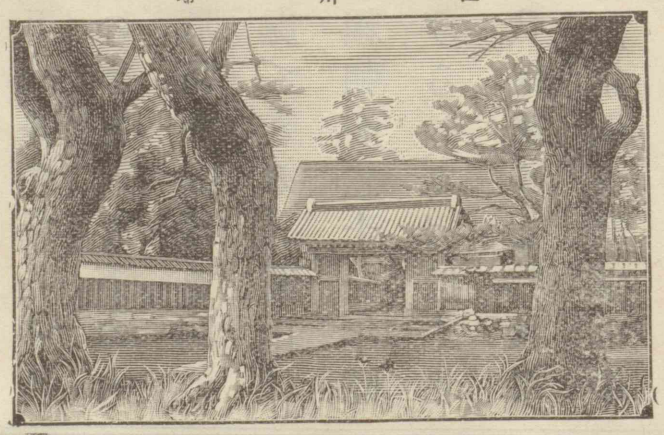
谷文晁　江戸の人、畫家、好んで富士山を畫いた（一七六四—一八三〇）

先づ第一に北を望めば、芙蓉八朶の富士山が天空を衝きながら、吾等の面に迫つて來る。其の莊嚴と端麗とは、覺えず人をして襟を正さしめる。昔から富士山の景色は、富士見十三州の中、口伊豆を第一等と仰ぎ、殊に其の隨一は、韮山にある江川家裏門からの眺望である。白河樂翁公は海防檢分として、豆相地方を巡回するに當り、畫家谷文晁を伴なつて、山海を寫生せしめた。文晁は生涯に幾百度となく富士を見たが、「此の門からの眺望こそ天下第一等である」と叫び、此處に在つて山を寫し、自ら寫山樓と號した。

日蓮上人　安房の人、日蓮宗の開祖（一二八二—一九四三）

江川邸は保元年間に建造されたもので、日本國中で最も古い住宅建築の一つである。自然生の立木を中心の大黑柱として、數百の梁を架し、鉋のない時代とて、割板のまゝ普請してある。日蓮上人が親ら書いて贈つた火難除の護符は、今に梁の上に藏めてある。苟も日本往時の建築を知らうとする者は、一度其の邸宅を參觀すべきである。

江川邸



伊勢長氏　北條早雲、武將（一四八二―一五一九）
北條氏規　氏康の第四子　氏政の弟
蛭小島　韮山町大字寺家の東、今田となつてゐる
山木判官　關兼隆、山木の目代、清盛の同族であつたので暴威を振つた
修善寺　田方郡。狩野川の左岸

江川邸の背面にある一小丘は、韮山の古城址である。伊勢新九郎長氏が創築して、關東八州を平げたのも此處である。北條氏規が、豐太閤の率ゐた天下の大軍を、一百餘日の間防ぎ支へ、小田原城の落城を聞いて、始めて開城したと云ふのも此處である。韮山城址の下は蛭小島である。卽ち源頼朝が二十一年隱忍の舊蹟であつて、其の大事を擧げるや、まづ近く北方にある山木判官の館を襲ひ、目代兼隆を血祭に擧げた。修善寺溫泉にも數多の古跡がある。其の中、蒲冠者範頼の墓と稱へるものは、眞僞疑はしいが、鎌

時政　北條氏第一代の執權（一七九七―一八七五）
鳴瀧　韮山の東南
江川太郎左衛門　名は英龍、號は坦庵、韮山の代官（一三四六〇―一三九一四）

倉二代將軍頼家の墓は正確なものである。二十三歲を一期として、時政の術策に陷り、此處に空しく芳魂を留めたかと思へば、人々が花の枝を折つて、碑前に手向けるのも、哀れにしのばれる。

鳴瀧の清い谿水の畔、大きな煙突が四つまで空に聳えて見える。是は日本近世史上の一英雄江川太郎左衛門の設計に依り、其の子及び門弟が、始めて近世式の大砲を鑄た反射爐である。江川師弟は和蘭の書に據り、鐵を鎔かすのには、大形の白燒煉瓦石、卽ち耐火性のものを用ひねばならぬ事を知り、天城山の

南麓梨本及び逆川の土を採り、本邦最初の耐火煉瓦石を製造させ、之を以て築いた爐と、鳴瀧の水力とに依つて、大砲を鑄造した。此の大砲鑄造所は、後、江戸小石川關口から、更に水道橋の水戸邸跡に移り、遂に今日の砲兵工廠となつた。それ故、日清・日露二大戰役に用ひた精鋭な武器の製造も、濫觴は此處に在つたのである。

修善寺から、西、達磨山を越えれば、戸田灣である。五十年前、露國軍艦ディアナの艦長プーチャチンが、始めて我が國で西洋形の船を建造した處である。

水道橋　小石川區に在る

達磨山　田方郡。伊豆半島西北の高峰

プーチャチン　嘉永六年に我が國へ來た

湯河原溫泉　相模國足柄下郡土肥村、小田原の南約三里

伊豆山溫泉　伊豆國賀茂郡熱海の東北二十五町

下田　賀茂郡。伊豆國の極南

嘉永　孝明天皇の年號（一八四八—一八五一）

安政　同前（一八五四—一八五九）

伊豆・相模の境上に在る箱根溫泉十三湯・湯河原溫泉、また熱海溫泉・伊豆山溫泉などは、世の人の熟知する所である。併し伊東溫泉の北端に在る一谿流湯川の口は、三百餘年前德川家康が、墨西哥航行の船を建造せしめた稀有の遺跡であることをも記憶せねばならぬ。

天城嶺を越え、奥伊豆に入れば、其の極端近くに下田がある。嘉永から安政年間に亙り、英・露・佛・米の軍艦が交〻入港すること十六回、吉田松陰が米艦に乘組まうとして挫折したのも此處である。松蔭は延いて

惜しい刑死を遂げるに至つた。

伊豆の最南端は即ち石室崎である。此處の一年平均溫度は六十三度で、羅馬のは五十四度である。即ち南伊豆は伊太利の大概の地方よりも暖かである。英・佛・獨の人士は、冬になれば「伊太利、伊太利」と憧れて行く。而も日本の伊太利は、我が國都から四時間の手近にあるのである。

（志賀重昂――續山水圖說）

石室崎　賀茂郡。伊豆極南の岬

志賀重昂　號は剱川。農學士、地理學者

乃木將軍　名は希典、長州長府藩士（一八四九―一九一二）

一九　乃木將軍旅順攻

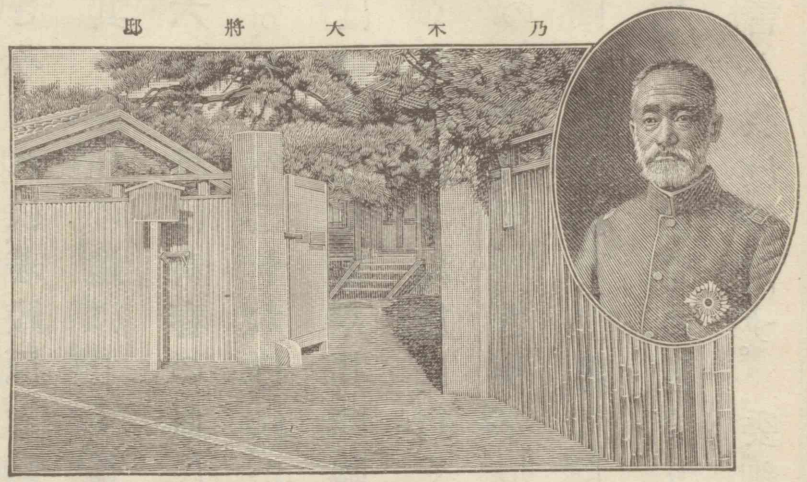
乃木將軍は第三軍に長として、不如歸啼くや五月の

さみだれに、若殿原と駒なめて、遠征の途に上りけり。其の遠征の途にして、長男中尉勝典（カツスケ）は、二十を過ぎて六歳の、身は青春の血に燃ゆる、若き士官の果敢なくも、五月の二十六日に、かの南山に戰ひて、父が子なれば勇ましく、善く其の職に堪へたれど、武運拙く傷重く、遂に歸らぬ旅に行く。果敢なきは實にかげろひの人の命ぞ。さりながら掌中の珠を失ひし、將軍少しも悲しまず、「戰場にして死ぬるのは、君に命を獻げたる、日本男兒の習なり。勝典名譽の戰死して、斯く言ふ我は滿足す。委細は文に知らせん」と、電報用紙

勝典　陸軍歩兵中尉　明治三十七年五月二十六日南山に戰死

南山　滿洲盛京省金州の南

妻
乃木靜子



に筆染めて、泣かぬは泣くに優りたる、胸中無限の感情を、短き文字に約めつゝ、妻なる人に言遺りつ。頓て戰地に上陸し、旅順の城に攻寄せぬ、天險にして人工の、粹を集めし旅順城、これや難攻不落てふ、極東一の堅砦ぞ。それに籠りしつはものは、要塞守る兵として、世界無雙の手練あ

第二の東洋艦隊　バルチック艦隊を云ふ

る、露西亞の勇士四萬人、此處を命の瀬戸ぞとて、油斷なくこそ守りけれ。されば世界の評判に、「日本いかに强くとも、よも此の城は落つまじ」と、言はぬ者こそ無かりけれ。

「此の難局は始より、覺悟の前の事なれば、たとひ金城鐵壁に、鬼籠るとも日本の、死ぬを恐れぬ軍人に、切所はなきぞ唯進め。旅順落ちずば日本に、まことの勝はなきぞとよ。眞の勝のあらざれば、國の命の危きぞ。必ず落せ落さずば、旅順艦隊滅びずに、第二の東洋艦隊と、合ふ事あらんさる時は、我が勇ましき戰友

は、後を絶たれ滿洲の、荒野に餓うる事あらん。されば必ず落すべし。旅順落ちずば帝國の、安危存亡計られず。命なりけり旅順城、茲に死なんは國守る、我が益荒雄の務なり。ゆめ犬死にあらざれば、必ず進め我が肉と、我が血を以て此の城を、必ず落せ殿原よ。我も死なん。」と將軍は、大將の身の自重せず、其の老顏を幾度も、敵彈落つる戰線に、現はしながら勵ましぬ。されど露兵も强くして、たやすく落つる氣色なし。攻めあぐみたる日本軍、弓張月の氣は張りて、心は何時も勇めども、敵壘高く攀ぢがたく、困じはててぞ見

七尺の屏風云々　七尺の屏風は躍らば越えつべし、羅穀の袂をも引かばなどか切れざらん（謠曲、咸陽宮）

其の霜月　明治三十七年十一月

保典　陸軍歩兵少尉　明治三十七年十一月三十日二〇三高地に戰死

爾靈山　旅順の背面に在る二〇三高地の要塞

えにける。

斯くて旅順の落ちざるに、露國の第二艦隊は、日々に近づき來りけり。「只此の上は血の海や、屍の山を積むとても、急ぎて落せ落さねば國の命ぞ殿原よ。げに七尺の屏風さへ、躍らばなどか越えざらん。命を國に獻げよ。」と、猛將・勇士の氣をいらち、たゞ一攻めに攻めければ、戰死の益荒雄多くして、其の霜月の十餘り、一日と云ふに勝典の、弟なりける保典も、爾靈山下に失せにけり。愛子二人が戰場の、露と消えたる悲みも、忠義の爲に思ひかへ、「軍人の習と云ひながら、人

人の子云々　王師百萬征ニ強虜一、野戰攻戰屍成レ山、愧我何顏看ニ父老一、凱歌今日幾人還（乃木大將）

の子多く死なせたる、我にしあればいとし子の、死にたるはげにせめてもの、心やりぞ」と健氣にも、言放ちたる將軍が、心すゞしき樣を見て、あはれ、我が此の大將の爲ならば、必ず死なん死すべしと、思はぬものぞ無かりける。

さしもに强き旅順城、科學の智慧と大國の、富を集めて凝りなせる、金城湯池なりけれど、科學も富も忠孝の、義に勇みたる精神の、其の通ひ路をせきかねて、靈の力に物質の、力は遂に勝たずして、敵の要地と賴みたる、爾靈の山も遂に我が、物となりけりそれよりは、

敵の守將　ステッセル

我が猛烈の砲擊に、旅順艦隊まづ亡び、敵の守將も開城し、我が軍門に降りけり。

將軍かくて名譽ある、戰勝の將軍となりけれど、子を失ひし親心、胸にたゝみし悲しさを、言はぬは言ふに增鏡、曇らぬ空もおのづから、「山川草木さみしくて、十里の戰場風さむく、馬は進まず人默し、金州城外の夕陽に立つ」と歌ひしからうたに、千々のおもひを籠めにけり。

山川云々　山川草木轉荒涼、十里風腥新戰場、征馬不レ進人不レ語、金州城外立ニ斜陽（乃木大將）

金州城　滿洲盛京省、金州半島の旅順に對する要處に在る

山路愛山　名は彌吉、史論家、文章家

（琵琶歌――山路愛山）

お首　足利尊氏が、正成の館へ送りとどけた正成の首

夫人　正成の夫人

「お首が御着きになりました。殿様が御歸りになりました。」

今日は尊氏の特使が到着すると聞いて、谷一つあちらまで出迎へに行つてゐた家族は、慌しくかう知らせました。夫人は小楠公を眞先に、自らその後に付添ひ、殘る五人の子供を從へて玄關に迎へました。

護送の任に當つた世瀨川有隣が、具に尊氏の口上を傳へる間も、夫人は胸が塞がる思ひでした。じつと手をつき目を閉ぢて控へてゐる頭腦の底に現はれるのは、馬・物具を立派にして、威風堂々と出陣した夫の姿でした。

唐櫃に納めた首級を奥の間の上段に安置して、一同が涙ながらに拜しました。冷たく凍りついたやうに見える皮膚の色、睨むやうに細く開いた眼のさま、油のぬけた頭髪の一筋にさへ深い恨を見せて、今にも物を言はうとする恐しい相好を拜したときは、誰一人鬼氣に打たれないものは無く、また誰一人口惜涙にくれない者はありませんでした。

その中に、夫人と對ひ合つて、最も上座に坐つてゐた小楠公が、何か決心した事でもあるやうに、卒然と身

を起して、持佛堂へ駈入りました。其の樣子が平生とは異つてゐましたので、夫人も續いて行つて見ますと、小楠公は佛壇の前に坐つて、櫻井の驛で父から貰つた菊水の短刀を引拔き、今しも自害をしようとして、腹を寛げてゐるところですから、夫人は驚き駈けよつて、刀を持つた小楠公の手を抑へました。そして慄ふ聲をおし靜めて、

「血迷うたか、狂氣したか、幼うても父のお子ぞ。何とてかく思慮のなき振舞をするぞ。父が櫻井の驛より御歸しなされし御深意を知らぬか。こゝにて自害せよと仰せられて、その御刀をば下されしか。その御刀には、父の御靈の籠りをるに氣付かぬか。父の御靈が、『汝成長の後、河内・和泉の一族郎黨を引連れて、朝敵を滅ぼせよ。』と、嚴しう戒めらるゝを知らぬか。目の前の悲に心亂れ、後々の大任を忘るゝやうにて、楠家の世繼と云はるゝものか。」と涙の中に教訓して、その刀をもぎ取つてしまひました。此の教訓は、楠公が湊川の難に殉ぜられた忠誠義烈と同じ程の、光輝と實質とを持つてゐます。

楠公の戰死は、小楠公に切腹の覺悟をさせるほど絶

望的のものであつたのでした。櫻井から歸つた時の小楠公は、飽くまで父の遺言を遵奉するつもりで、小さい胸に大きい計畫を持つてゐたのですが、父の無慘な首級を見ると、もうそれを守つてゐることのできぬほど胸が迫つて來たのでした。もし夫人の强烈な教訓が無かつたなら、小楠公は此の際死んでゐたでせう。吉野朝の基礎が、楠家一族の武士的精神によつて置かれたものとするならば、夫人の此の教訓は、此の基礎を据ゑつけた大きな力と云つて宜しい。楠公の殘された偉大な精神と、夫人の持つてゐた剛健な氣象とが融けあつて、小楠公の胸に流れた時、小楠公は強い決心を堅めたのです。一族を擧げて義の爲に盡さうといふ決心を堅めたのです。

普通の夫人では、到底堪へることのできぬ苦痛と艱難とに、夫人は堪へました。夫の最後に遭つては、自分が夫に代るだけの勤めをしなければならぬと覺悟しました。家の亡びるのを見ては、己の任務として家名再興の大事を成しとげねばならぬと決心しました。さうして次々に現れて來る艱苦難澁と戰ひました。

世は足利の掌中に握られました。けれども尊氏は楠公の誠忠に同情するあまり、楠家の遺族に對つてはさのみ峻烈に搜索の手を擴げなかつたやうに思はれます。然しどちらかと云へば日蔭の身です。風の音にも心を置く敗殘の一族です。たとへ河内和泉兩國民の同情によつて、無事の日を送つたにしても、一方ならぬ貧苦の中に六人の子供を保護し敎養せねばならぬ夫人の苦しみは、頗る强いものであつたに違ひありません。

けれども夫人の努力と、その胸に漲る慈愛の念とは、

花山院
京都、近衛の南、東洞院の東一町にあつた建物

小楠公の性格の上に現はれました。小楠公は楠家二世の棟梁として、父の精神と家の名譽とを繼承する大器量を持つに至りました。後醍醐天皇が尊氏の爲に世を狹められて、元弘元年十二月二十一日、潛に都の花山院を出でさせられ、雪の深い吉野山へ御入りになつた時、かひぐ〳〵しく鳳輦の警護に當つて、武士の任務を盡したのは、まだ元服もしてゐない小楠公でありました。天皇は生殘る一族郎黨を引具して、供奉の列に加はつてゐる小楠公の健氣なさまを御覽になつて、いかに末賴母しくまた心强く感じ

られたでありませう。天皇は吉野山の行宮に御着きになると、父の勳功を思召されて、小楠公を正四位下に叙し、檢非違使左衞門尉に任じ、河内守を兼ねさせる事とせられました。これは父の官位をその儘に下されたのであります。楠公は湊川の露と消えられても、小楠公の存在によつて、その凛烈たる忠義の魂は生前の通りに働いてゐます。四十三歳の體軀が十二歳の少童に變つただけで、官位にも職掌にも、責任にも地位にも、何等の變化は無かつたのであります。

（高橋淡水――楠公夫人）

高橋淡水　著作家

曾呂利新左衞門　和泉の人、鞘師であつて茶事・和歌に長じてゐた（一二六頁）

二一　太閤と曾呂利

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ」と問はせけるに、其の者「臣が姓名は曾呂利新左衞門と申し候」と答ふ。太閤「はて奇な姓もあるものかな。して、其の曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもあるか」と問はせけるに、又答ふるやう「聊かいはれこれあり候。別儀にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くして、そろりと入り敢てつかへず、こゝを以て曾呂利と申し候」と言ふ。太閤「こは奇なり。また

折節來るべし」と言はる。

他日又太閤に謁しけるに、太閤「汝の姓名は何と申したる」と問ふ。答へて曰く、「曾呂利曾呂利、新左衛門新左衛門」と。太閤怪しみて其の重言を尋ねけるに、新左衛門「殿下曩に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に從ひ、同じく重言を以て答へ候なり」と言ふ。

新左衛門或時太閤に對ひ、「願はくは一日御耳の香を嗅がせられたし」と言ひければ、太閤は訝しく思ひ、こやつ又何をかなすらんと疑はれしが、「よし、汝がよきに嗅ぐべし」と許されしかば、諸大名の御機嫌伺に出づる時を窺ひ、太閤の耳元に口寄せて、何やら言ふ體なれば、皆々心中ひそかに驚き、「かやつ何をか言ふらん。若しや我を讒言するものにあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛を得たれば、其の言ふこと御用ひあらんも測られず」と憂ひ、各わが屋敷に歸りて、早早數多の金銀財寶を調へて、ひそかに曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集りければ、太閤の御前に出でて謝して言ひけるやう、「殿下一日の御耳を拜借し、其のかぐはしき香を嗅ぎたる

效能によりて、金銀・財寶山の如く集り來りて、殆ど坐する餘地これなく候。これ全く殿下の御耳の效能なり。」と言ひければ、太閤もまた呆然として驚かれけりとなん。

又或日の事なりしが、新左衞門太閤の機嫌を取り、頗る其の效ありける程に、太閤の、「何なりと汝の望まんものを取らせん。」とありけるに、新左衞門言へるやう、「臣敢て大いなる望もこれなく、たゞ紙袋二個程米を賜はりたし。」と言ふ。太閤、「そはいと〳〵易きことなり。餘り寡欲ならずや。」と仰せありけるに、新左衞門、

「これにて澤山なり。」と申して退出せしが、やがて二個の紙袋を張拔き、數十百人を雇ひ來りて、太閤の御前に出で、「前日御約定の米、これに賜はりたし。」と、米倉二戸前を蓋ひたりけるにぞ、さすがの太閤もこれに呆れて、暫しは言葉もなかりけり。

又太閤嘗て金銀の蟹を數多造らせ、これを庭の泉水或は其の近傍に放ちてたのしみとせられけるが、程經て見飽きたりとて、近習の者に、「何ぞ一用を言出づる者には之を與へん。」と申されけるにぞ、皆々大いに喜び、「臣は之を紙押になさん。」と言ひ、或は「臣は金の茶

釜の蓋もなければ、せめては之を以て其の蓋のつまみになさん」と言ひ、或は何と言ひ、かと言ひて、各一個を賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、「臣は人間の相撲も既に見飽きしことなれば、此の蟹を集へて、相撲を致させんと存ずるなり」と言ひければ、太閤、「相撲ありては、五個や十個にては其の興薄かるべし。悉く持行くべし」と、殘れる蟹を皆新左衛門に與へられけりとなん。

（湯淺元禎――常山紀談）

湯淺元禎　號は常山。岡山藩士。天明元年歿、七十四歳

二二　木村重成の妻

茶臼山　大阪四天王寺の西南

夏の陣　元和元年（一六一五）

去年　慶長十九年（一六一四）

影にそふ形のごとく亡き靈も
君を守りて離れざりけむ

茶臼山の和議いかでか永へに平和を保たんや。これ元より一時の權謀に過ぎず。軍馬を休めしも束の間にて、再び夏の陣とはなりぬ。關東の寄手大擧して大阪城を圍む。故太閤の餘德を偲びて、參集せしもの數萬騎に及べども、譜代の士少なくして、多くは只これ烏合の勇士のみ。

去年の十二月十九日、和議の御誓文御取交しの使として、主命を辱めず、而も其の威風關東武士の膽を寒

木村重成　豐臣秀頼の臣　夏の陣に河内國若江で戰死した（一三三一―一二七三）

今福　攝津國東成郡　今は鯰江町と改稱した

からしめ、尙老將家康をして、感涙の袖を絞らしめたる木村長門守重成の妻は、眞野豐後守頼包の女なり。容姿の美にも彌增し、心優にして操いと高し。

昨日今日、夫の氣色常に變りて、食事さへ斥け、深き思案に打沈めるを見て、訝しさに堪へず、夫に向ひて、「去年今福の合戰に、君の功名の大なりしには、關東五十萬の大軍も驚けりと傳へ聞き侍る。今豐臣氏の武運は朝暮に迫れり。日頃の御高恩に報い奉るは今日なり。然るに何とて物思はしげにして、食事をさへ斥け給ふぞや」と問ふ。重成莞爾として打笑み、「御身の訝しむも理なり。こは餘の儀にあらず、五穀胃に入りて、二十四時を經ざれば消えずと云へり。今は何時討死するか圖り難し。されば穢き物を斥けて、潔き心を出さんのみ」と。夫人これを聞きて、欣然として退く。

翌朝起出づれば、こは如何に、夜半の嵐も吹かなくに難波の春に先立ちて、散行く梅の花一輪、我と我が喉搔切り、見事に自害して夫を勵ましたり。重成且驚き且悲しみつゝ、妻の遺書を見れば、水莖の跡鮮かに、

一樹の蔭、一河の流、これ他生の緣と承り居り候が、

さてもをとゝせの頃ほひ、偕老の契をなしてより只影の形に添ふが如く思ひ參らせ候に、此の頃承り候へば、此の世かぎりの御催の由、蔭ながら嬉しく思ひ參らせ候。唐の項羽とやらんは、世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名殘を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別を惜しみきとかや。されば世に望窮りし妾が身にては、せめて御身の御在生中に最期を致し、死出の道とやらんにて待ちあげ奉り候。必ずく秀頼公多年海山の鴻恩御忘却なき樣、頼み上げ參らせ候。あらくかしこ。

項羽　名は籍、楚の人、劉邦と戰うて敗れた（紀元前233―紀元前202）

虞氏　項羽の妾

木曾義仲　源爲義の孫義賢の子（一八二四―一八四四）

松殿の局　關白藤原基房の女、此の事は源平盛衰記卷三十五に在る

長門守重成樣　妻より

さても健氣なる覺悟やと、疾くに死を決したる重成の心は、妻の自殺に因りて益〻固く愈〻奮ひぬ。今福の合戰に、一騎當千と聞えし剛の者木村重成も、元和元年五月六日、遂に安藤某の手に首は渡しぬ。若木の櫻は散りても、髻の中の蘭麝の薫は永へに世に匂ひて、今に滅せざる天晴床しき重成の最期と共に竝び稱へらるゝは、其の妻の最期なり。時に重成二十一歳、妻は十八歳なりき。（海上龍子――たのもしき婦人）

海上龍子　歌人海上胤平の養女

運河　スエズ運河。スエズ地峽を切開いて紅海と地中海とを通じたもの

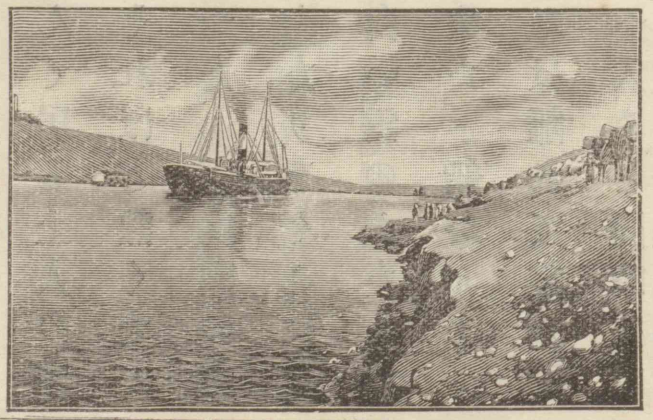
二三　スエズ運河

翌朝早く我々の船は港を離れた。そして名高い堀割の入口にさしかゝつた。乘客は皆勇み立つた。もうそこまで行けば、ポートセットに行つたも同じやうなものだ。この喜が單調な船の動搖に倦んだ人々の顔に讀まれた。

運河の兩岸は呼べば答へる程の位置にある。十三驛ほどあるステーションの一つ〳〵が、順に靜かに我々の眼前に展けた。時とすると船は湖水の中を

イスマリア　運河に沿ふチムサ湖畔にある町

通りぬけて、また堀割を徐々と進んで行つた。イスマリアといふところまで行くと、そこには運河の中の港が見えた。青葉につゝまれた人家も見えた。遠く砂原つゞきの丘陵の、起きたり伏したりして居るところどころに、僅かに短い草や灌木を見るやうな兩岸の眺望は、私の疲勞を忘れさせた。私は埃及の岸の見える方へも行き、アラビヤの


スエズ運河

岸の見える方へも行つた。白く黄ばんだ砂まじりの土の上に、駱駝を牽いて來て休んで居る土人の影も見に行つた。不思議にも、日はそれほど熱くなかつた。あるステーションまで行つた。丁度國の方で春先の摘草にでも行く頃の日あたりをそこに見つけた。綿のやうに浮んで居る白い雲のかたちまでが、何となく國の方の空に似て來た。船がポートセットへ着いた頃には、もう一度私は離れて來た國の方の氣候にめぐりあつた。港へ入ると同時に、私は激しい疲れを感じて來た。更にそれから先の旅

ポートセット　スエズ運河の地中海口にある港

の空を思つて、せめて碇泊中は身を休めて行かうとした。

「ポートセットへはお上りになりませんか。私はこゝから露西亞の船に乘ります。一つアレキサンドリアの方を廻つて見て行かうと思ひます」。

とM君が私の側へ來て言つた。旅慣れたM君は濠洲生れの宣教師を道連として、我々の船を離れようとして居た。

「へえ、もうお別ですか」。

「多分マルセーユの方で、またお目に掛れるかも知

アレキサンドリア　ナイル河三角洲の北西端にあるエヂプトの港

マルセーユ　地中海に面したフランスの港

れません」。

こんな言葉をかはして置いて、M君は手を分つて行つた。日は暮れようとして居た。伊太利人のマンドリン彈が夫婦と娘と三人連で我々の船に上つて來た頃は、もうM君は私の側に居なかつた。私は獨で悄然と港町の見える甲板に立つて居た。東洋の港を見て來た眼でその周圍を眺めると、何となく歐羅巴の方の空氣がそこへ通つて來て居るやうにも思はれた。

にはかに鈴のついた樂器を振鳴す音が起つた。歌

マンドリン　伊太利固有の樂器

も始まつた。ぼつ〳〵港見物の連中が歸つて來る頃を見計らつて、夫婦の音樂者がマンドリンを彈きはじめた。その節につれて、娘は私の見て居る前で、歌ひながら踊つた。あの同室の歌うたひが、食堂で一所懸命に歌つたのを聞いた時は、面白くも可笑しくもなかつた私が、却つてこんな錢取にする娘の聲に誘はれた。

一曲濟んだ。音樂者の細君は亭主の冠つて居た麥藁帽子を裏返しにして、それを皆の間へ持廻つた。買物をして港の方からそこへ歸つて來る客がある。

娘は聞手の揃ふのを見計らつてまた歌ひ出した。旅で西洋の藝人などに逢ふのも始めてだ。思はず私は涙が迫つて來た。

（島崎藤村――海へ）

二四　水の都

ヴェニスは伊太利の有名な都市であつて、風景の美を以て世界に喧傳された水の都である。此の都は北伊太利の沿岸で、ポーの河口に近い地點にある。街は大きな潟の内にある島であつて、陸とは全く離れて居り、又海に向つては、長く斗出した洲

ポー　アルプス山系に發し、東流してアドリア海に入る。長さ四〇〇哩

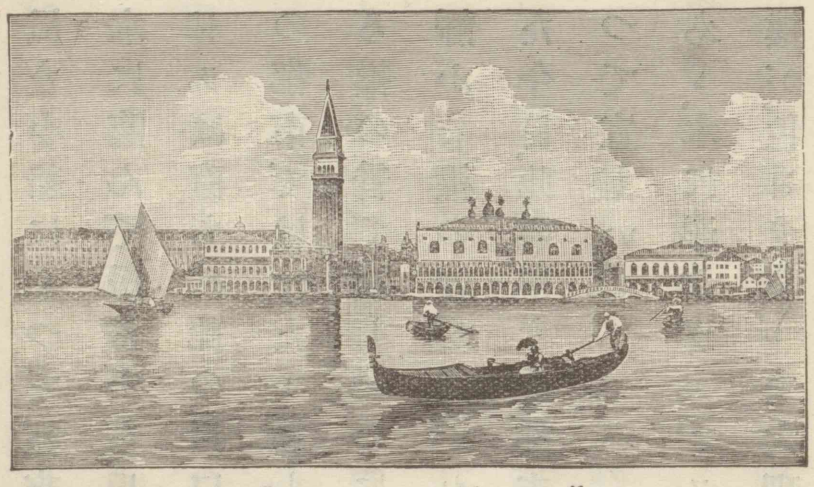
崎に依つて限られて居る。陸からも海からも攻めにくい要塞地で、潟の内は安全な一箇の城郭のやうなものだ。街は其の潟の中央なるリヤルトの島に置かれた。中世の初、幾多の蠻族が伊太利を荒した時、人民の或者は逃れて此の險要な潟に據つて、こゝで漁業を營むこととなつた。これがヴェニスの創始である。此の地は軍事上險要の地であつたばかりでなく、其の潟は少なからぬ漁鹽の利を藏して居た。ヴェニスの住民がおひ〳〵發達した其の資源は、此等の利に依つて得たものである。それぱかり

てなく、歐洲内地と東方諸國との交通の要路に當つて居たので、遂には中世第一の商業市と云はれる位な盛況を呈するに至つた。

ヴェニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ陸からも攻められずに、安全な生活を營むことが出來、水あればこそ漁鹽の利を收める事が出來、水あればこそ更に四方に航海・通商を試みることが出來たのだ。其の美しい風景も全く水の賜に外ならぬ。此の様にして、ヴェニスは、全く水から生れたやうなものだ。ヴェナスの女神は水に浮ぶ泡から生れた

ヴェナスの女神

ローマ神話中にある女神、海水の泡から生れたといはれてゐる



が、ヴェニスの都もまたそれに似たものと云へよう。初め、都は海に面した洲崎の一端なるマラモッコーにあつたが、後に潟の中央なるリヤルトの島に移つたのである。今は此の島全體が都となつて、其の間を縦横に無數の運河が通じて居り、人は此の水の通りを、ゴンドラと呼ぶ古

風な小船に乘つて往來する。多くの人家は直ちに水に臨んで居るから、戸口の石段は水に洗はれ、ゴンドラは直ちに此の戸口に着けることが出來る。他の都市ではけたゝましい自動車の警笛や、鋪石を軌る轍の音で喧しいのに、ヴェニスでは水を分けゆく靜かな櫂の音が聞かれるばかりだ。文明の進歩した今日、此のやうな都市は、實に世界に稀なものと云つて宜しい。

あゝ、水に浮ぶヴェニスの都、昔の榮華を語る大厦高樓が、色さまゞゝな大理石に時代の古びを見せて、一

灣の水晝の靜けさに眠る上に、蜃氣樓かと見紛ふばかり浮ぶ時、或は夕日に赤く彩られた眞帆片帆の、滑かな水面をたゆたふ時、或は又遠く銀髮の靡けるが如く、潟の彼方を限る洲崎の間を分けて漁船の歸り來る時、若しくは月靜かな夜、ゴンドラの船歌面白く、水に映る町の燈火を櫂の先にかき亂して行く時、水に浮ぶヴェニスの都の美しさは、如何に遊子の心を動かすであらう。朝の霞にも、夕の霧にも、春夏秋冬、ヴェニスの美は即ち水の美に外ならぬ。

併しヴェニスが水に負ふ所は、啻に其の美觀ばかり

ではなく、又實に水のために立派な海港となることが出來たのだ。即ち其の住民は水を利用して、アドリア海から遠く東に航し、小亞細亞・シリヤ・埃及の沿岸に通商貿易を試みた。從つてアドリア海は、ヴェニスの爲には貴重なものであつて、これがなければ、到底あの樣な發達は望まれなかつたのである。さればこそ昔のヴェニス人は、アドリア海をヴェニス市の夫と見立てたのである。都を妻とし海を夫とする、何と美しい想像ではないか。ヴェニスが繁榮を極めた時代には、此の想像に基づいて、こゝに昔床

しい儀式が行はれた。それはヴェニスの町とアドリア海との結婚式である。此の式は市民が行ふ儀式中、最も莊嚴・華麗なもので、毎年一回づゝ行はれた。此の日ヴェニスの長官は、自ら花を飾つた政府の大船に坐乘し、後には無數の貴族の船を從へ、美しい行列を作つて、悠々と海上に漕出し、こゝでヴェニスの都を代表して、黃金の指環を海に投じ、斯くてアドリア海と千年の契を籠めたのであつた。夫アドリアと妻ヴェニス、一は人間の作つたもの、一は自然其の者。其の「自然」なる夫は朝夕潮の滿干に洲崎の岸を

洗ひ、リヤルトの島を訪れて、千萬年も變らないけれど、「人爲」の妻は衰へて、今は到底昔の誇も榮華も認められなくなつた。

（大類伸「ヴェニスとフロレンス」に據る）

ロード、アイランド
コンネクテカット
二つともアメリカ合衆國の太西洋岸に面する州。前者は東に後者は西に相並んでゐる

二五　自然の調和

夜がほのぐと白み初めた頃、列車はロード、アイランドを横切つて、コンネクテカットの、岡がかつた若い白樺の林の間を走つてゐた。うとくと夢の多い眠から覺めて、窓の外を眺めると、上弦の月が淡く殘つて西の空に低く落ちかゝつてゐた。東の窓からは、もう幽かながら日の目も見られる事だつたらう。透通るやうな果てしもない濃藍の空は稍〻黃を交へて、濁のない鱗雲がほのかに紅く休らつてゐた。然し地の上には木蔭や叢の間に、夜の影がまだ紫色にさすらつてゐた。なよくと、肌の白い樺の若木は、小さな心臟のやうな葉を擴げて、靜かにしつとりと立並んでゐた。淡黃、淡紅、淡綠の秋の葉には、重過ぎるほど露が宿つてゐた。さうして凡ては唯靜かにしめやかだつた。

自然の移り變りのあわたゞしさに增して、慌しいも

のが何處にあらう。美しくない自然は何處にもない。一生の間に自然の美しさを見盡すのは、あまりに容易な事の様にも見える。然し自然が笑ふ時なのか泣く時なのか、凡てが調和の極に達するやうな瞬間の美しさは、短くない一生の中にも、幾度も見る事は出來まい。今朝私の見た自然は、そんなに美しい自然だつた。私は一種の壓迫をすら感じながら、夢中になつて窓の外を眺めた。それは然し、五分とは續かなかつた。見る〳〵中に西北の方に一叢の濁つた雲が湧出たと思ふと、完全の極みに達した調和は、他愛なく破れて、自然は眼の前で平凡な自然に歸つてしまつた。

（有島武郎――迷路）

二六　暴風見舞

昨夜の大あらしがうそのやうにやつと雲きまり日影さし出づるを見すまして、すぐ隣に住まる必地なりしかなさて〳〵近頃に覚えぬ大荒にはひしかな手高かた重手に在りし栗の木二本は根をさらかさまに倒れたりし風向は何方

にてなれしにかはらぬ西より北より南よりのきまはすかと思ふやうにて家の内は舟に乗ると同じやうに覺えひきさりなどする私方は平家造の上に地所も低くひくばさしての障なるひへども貴方樣は高臺にて殊に二階造なれば如何に貴てひつらん塀垣などの拵もあるべきやうなれども氣遣はるゝなぜられぬまゝ取りあへず出向ひ申上げかしこ

同返事

早速出人にて御尋ねいたゞき有りがたく存じ候御通り昨夜はまきたる如くに吹しなれども倒るゝ響いはんやうなる一時は屋根も柱も引抜きのやうにて行かゝる事と覺悟致し申候扨かゝる父は昨日の土曜よりかけて近郷の秋を探りにと一夜の旅に出で車一當宅はたゞ老人と女よばかりゆゑ如何せましと遂に覺えず恐ろしき心地致

されたひしが逃げ出入の者集り家には支柱を設し屋根には物を置きなどかびくくと致しられたひしかばそれにわし心強くなりて明方よりはやくやく物置ゆるやうにおぬを人々朝見れば倒れしはまはりの塀と垣とばかりにて門前の長屋も裏の物置も破損せり中すほどの處もなくさては鷺の方おびただしかりしかと我ながらうらかくなどひたる宅の裏なる栗の木も倒れたひし由惜しき事迄ばられ私方柿の實悉く落ちひらて大方は傷つきひとども中にて満足なること選りて出妹の様がたの出慰に差上ひらればも出同様に事なくて済みつるは行ひに出家族出家族出る様へ宜しく出禮願ひたてまつること（樋口一葉―通俗書簡文）

二七　顔

小春日和を二三日屈託させた雨が晴れたのに、かてて加へて日曜とある。朝から駒下駄の音が、門外に

砲兵工廠　東京市小石川區春日町にある軍器の工作處一

椎の木　阿部伯爵邸前にある有名な椎の古木

西片町　東京市本郷區

絶間なく響く。自分も電車通まで用たしに行く。砲兵工廠の烟突から出る烟も、今日ばかりは首を振らずに眞直に上る。空を突通す樣に上つて行つて、上の方で威勢が挫けてぱつと四方へ散亂する。

椎の木の邊まで來ると、西片町の「い」の部の横町や「ろ」の部の横町から、小豆色の裾や縞甲斐絹の蝙蝠傘が眼にちらつくやうに出て來る。空橋の上には、下を往く人の頭へ砂を蹴つてゆくかと思はれる靴の踵が頻繁に飛ぶ。見上げる下宿屋の部屋々々も、今日は全く空になつてゐるらしい。机ばかりが開けは

なした障子の中から、退屈さうに見えて居る。

さて傘をさして歩いて往くと、傘の前へ色々な顔が現はれる。長い顔、丸い顔、平たい顔、四角な顔、それらが嬉しさうな目をして往く、思案ありげに眉を顰めてゆく。尤らしく髯をひねつてゆく。時計屋の角からは愈往來が忙しくなる。風呂敷包に、鈴なりの柿の枝を持添へたばあさんの顔が來ると思ふと、年數をかけて磨きあげたかと思はれる粹な年增の顔が來る。ステッキを振りまはして角帽が往つてしまふと、低い鼻を無理やりに鼻眼鏡で挾んだ氣取やが

通る。さうかと思ふと、印半纏を着た職工の黑い顏が、いきなりひよいと現はれる。

顏さまざまの人心、めいめいに種々な方向へ種々な事を思つて通るのである。誰が何の爲に何を思つて通るのやら解らぬところが面白い。人の世はさまざまである。學者も通れば大工も通る。詩人も通れば商人も通る。惡人も善人も君子も小人も通る。今すれ違つた男が犯罪者であつて、後から來る彼の爺さんがえらい慈善家であるかも知れぬ。若し此處に審問所を置いて、一時間も往來する人の顏に質

川越　武藏國入間郡にある町、附近の田野から薩摩芋を產する

大塚楠緒子　文學博士大塚保治氏夫人。女流小說家。明治四十三年歿

問をこゝろみたならば、架空な理窟ばかりに頭腦を疲らしてゐる哲學者の大論文よりも、ずつと鋭く宇宙の眞理を穿ち、人生の意義を闡明する報告ができるかもしれぬ。こんな詰らぬことを考へながら、足元も見ず傍目もふらず、めまぐろしく接する人の顏を次へ次へと送つて、夢中になつて歩いて往くと、忽ちぱつたりと大きな物が眼の前に現はれた。びつくりして立止つて見ると、それは川越あたりから曳出して來たと覺しき薩摩芋の荷車を附けた、大きな大きな馬の顏であつた。

（大塚楠緒子――曉靄集）

二八　蟲の聲

私は一年の中で、秋が一番好きである。「なぜ生きてゐるか、どう云ふ目的で生きてゐるか。」と問はれると、「秋を味はふのが、生存の一つの目的である。」と答へるぐらゐに、私は秋を好ましく思ふ。そして私が秋に對して感じる心持はどうかと云ふに、荒立つた後に來る澄んだ心である。例へば悲しいとか腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に、非常に靜かな落着いた氣持になる。其の荒立つた感情の後に來る心

持、それが秋の心持である。兵士が劇しい荒びた戰爭に飽いて、發心した心持にでも喩へようか。兎に角、細かく、優しく、そして澄んだ感じである。さう云ふ心持は、秋の風物のどんな物にでも現はれてゐる。物の形で云ふと、日光・雲・草花など、それ等の物にも、此の心持は著しく現はれてゐる。匂で云へば木の花、觸覺に感ずるものでは冷たい風、聽覺に來るものでは蟲の音で、其の總べてに、先に述べた秋の感じは現はれてゐるが、殊に蟲の音に最も著しい。耳に觸れるものでは、春はいろ〳〵な小鳥が鳴くし、

又夏の晝には蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春の朧夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも較べられるが、蛙の聲は單調で、蟲の音ほど複雜な豐富な、そして細かな感じを起させない。其の點に於て蟲の音は最優等で、先に述べた秋の感じなり味ひなりを一番深く現はしてゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは外的とでも云ふのか、外に現はれる樣な趣を持つてゐるが、蟲の音は內的である。蟲の音を聞くと心の眼が內に向つて開くと云ふ趣がある。

銀座　京橋區にある

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴初めるる。それも好い。秋に入つて月夜に鳴くのも好い。闇夜に鳴くのも好く、又聞きながら眠に入るのも好く、夜中にふと目覺めて聞くのにも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ〴〵異なつた情趣と味ひとがあつて、何れも好い。殊に夜汽車にでも乘つて行くと、或淋しい驛へ着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅のあはれも一入覺えられて、深い味ひがする。又夜の銀座の明るい賑かな通を歩いてゐて、細

い暗い露路に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。更に趣が深い。それから秋、毎晩蟲の音を聞いて、それが冬の初になつて、今まで蟲の音に慣れてゐた耳に、全く何の音もしないのに氣がつくと、堪らなく寂寥を覺えるものである。

（沼波瓊音―しら椿）

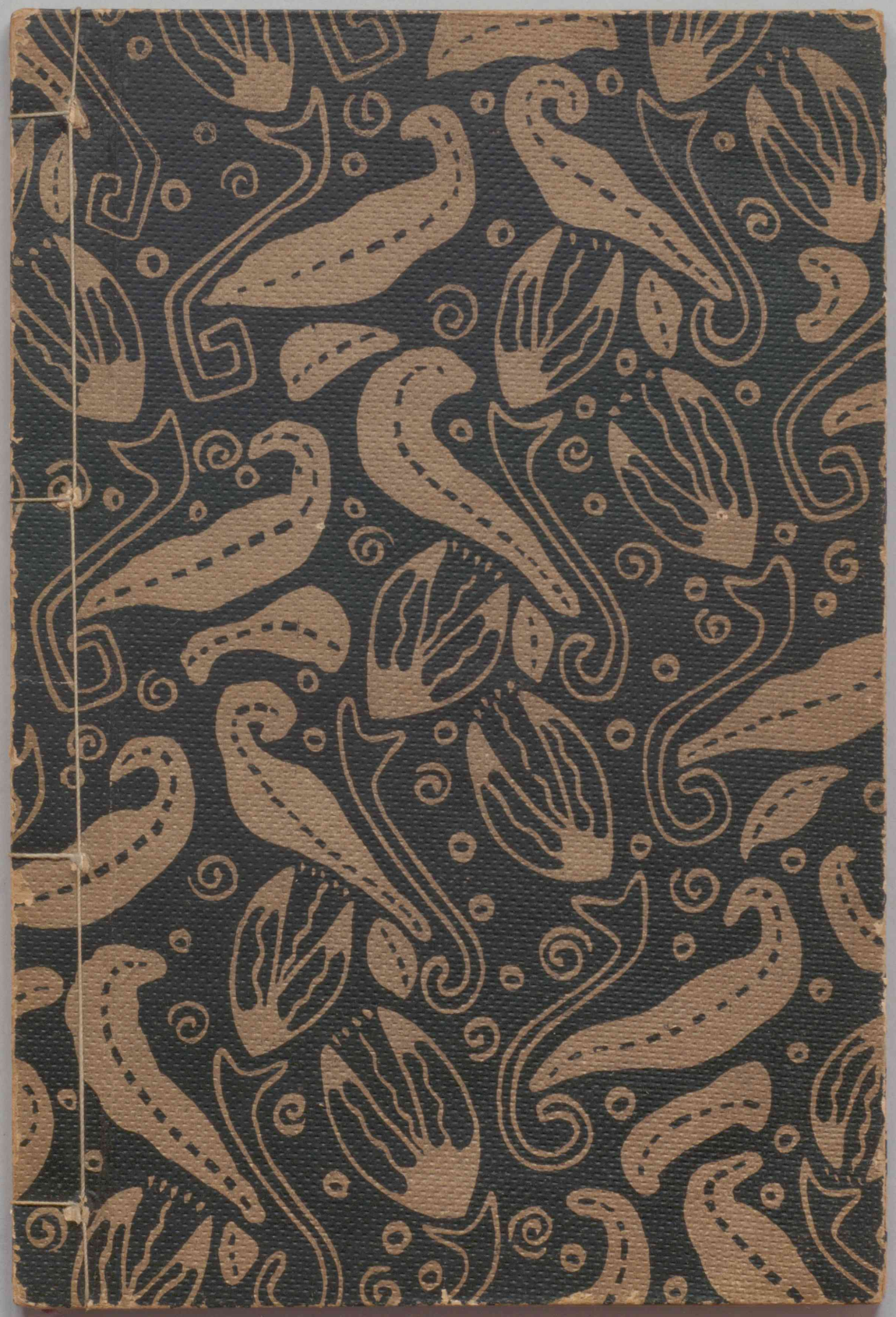
沼波瓊音　名は武夫。文學士、文章家、俳人

大正女子國文讀本修正版　卷三　終

大正七年九月廿五日印刷
大正七年九月廿八日發行
大正七年十二月十五日訂正再版發行
大正十一年九月廿九日修正發行
大正十二年一月十八日修正再版印刷
大正十二年一月廿二日修正再版發行

大正女子國文讀本修正版　全拾册
卷三、　定價金參拾六錢
大正十二年度臨時定價　金六拾壹錢

著作權所有

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町廿九番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市牛込區白銀町廿九番地　合資會社育英書院　振替口座（東京）七四二番
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　目黑書店　振替口座（東京）二八〇九番